

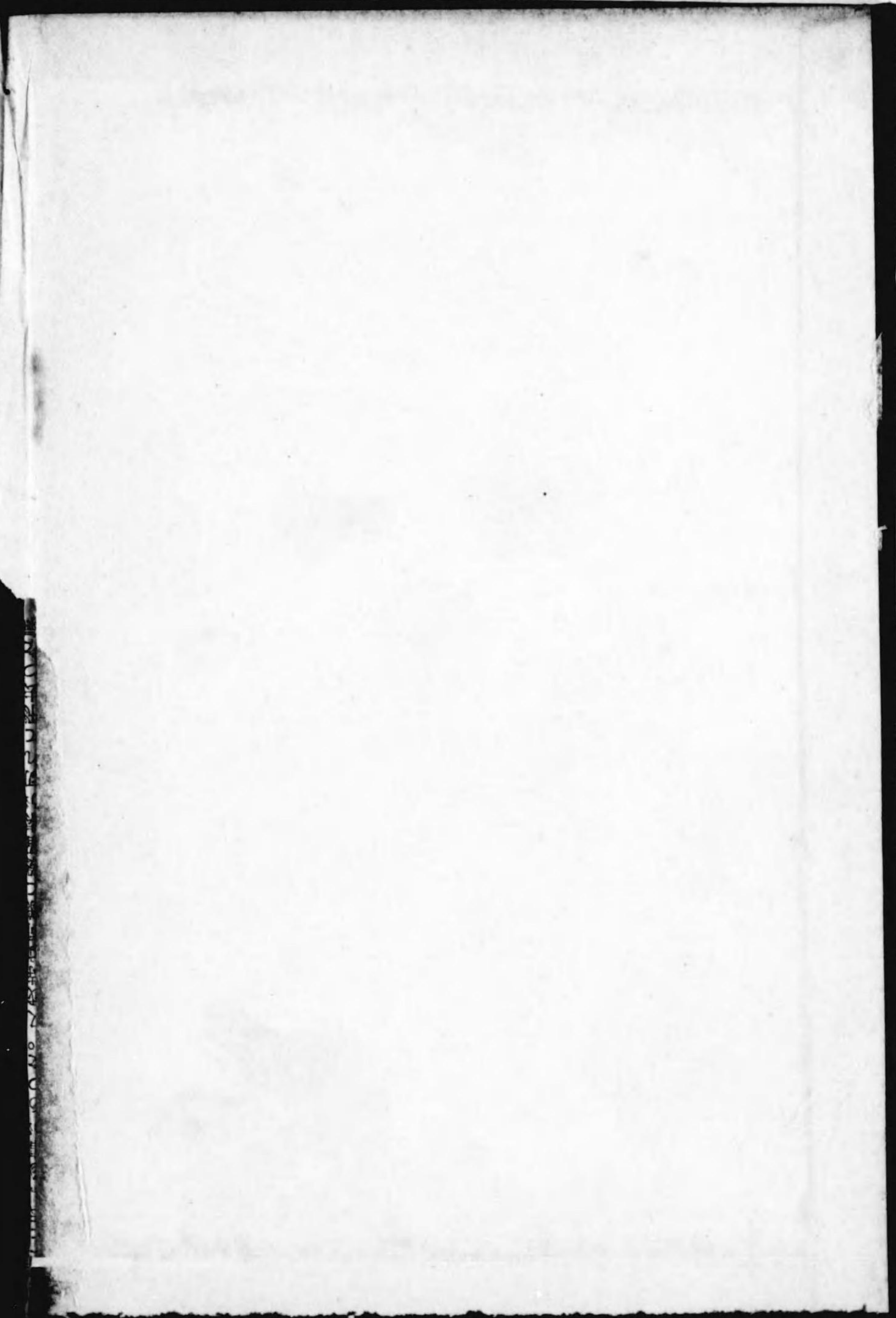
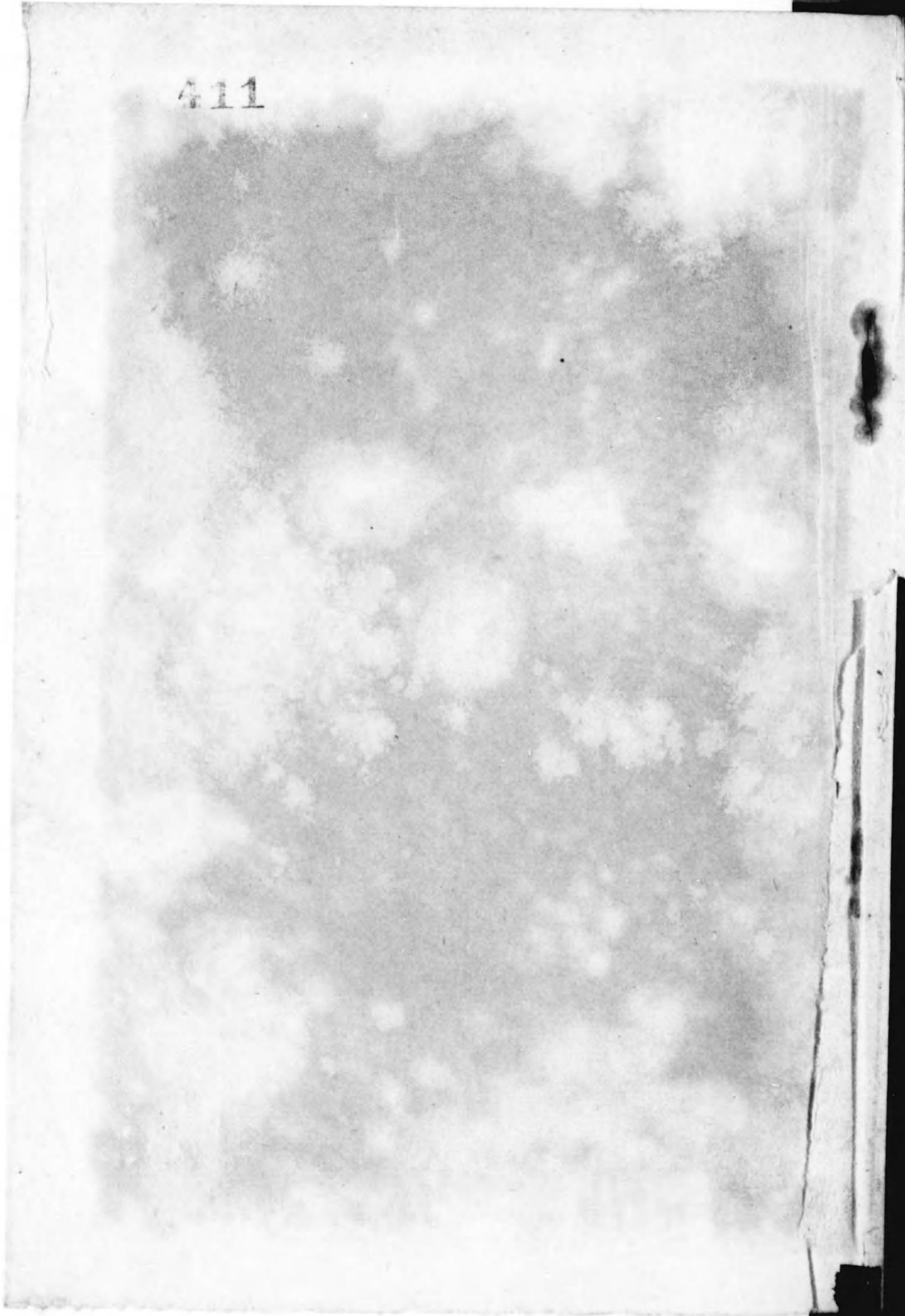
398
323

6 7 8 9 6^m 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 7^m

始



411



特 232
989



是
我
觀

村
田
光
烈



自序

此小著は前著『土を流るる永遠の愛』に次いで出版すべかりしを、機を逸して今に及んだものである。有害無益の過去は之を返すに由なく、此小著は唯私の生活過程に於ける一の道しるべとしての出版に過ぎない。私は既に過去の一切を斷つて、今や最も正しい意味での自由の境地に身を置いて居る。眞に自分の本質を生かすのは之からのことに屬する。

小著の内容に就いては今更何も云ふことがない。可なり舊いものから、少し前までのものを取交へて居り、中に多少の筆を加へたものもあるが、其時々自分の歩みを知る爲にもよいと思つて多くは其儘にして置いた。

ロングフェローは、彼の『人生の讃歌』に於て、『死せる過去はその死をして葬らしめよ』と歌つて居る。たとひ如何なる過去にもあれ、それが苟くも自己

の現實に屬する以上、好むと好まざるとに拘らず、我等は唯其如是現實の道に於て最善を盡すより外に仕方がない。

私は私の人生に於ける再出發の意味で、此小著を世に送るものである。

昭和十五年三月十七日

村田光烈

目次

自序	一
運命を信ずる心	一
光の世界へ	七
使命の爲に	一三
自我の根本意志	一九
北國より	二六
庄内に旅して	三六
政治の思想化及び道德化	四四
藝術と實行	五〇
原始生活の追慕	五五

直接あなた方でなくとも、あなた方の父母の僅かの不注意や怠慢が、あなた方を斯る逆境に置かしたのもあるかも知れません。

然しながらすべては運命です。たとひどんなに不衛生をしても、若しくはどんなに危険なことをしても、其處に何等別條の起らぬものもあれば、僅かの動機で取返しのかぬ境遇に立到るも、同じく是れ拒み難き運命のする仕業です。所謂宿命であり宿業でありませう。然しながら其運命を通して我々人間は、其處に一段と深い人生に生き行くことが出来ないでありませうか。成程恵まれざる運命こそはまことに悲しき此世の事實ではあります。然し同時に運命を信じて、更に人生の無限性に生き行くことは不可能のこととせうか。

露西亞の文豪ドストエフスキーは云ひました。『我々が不幸なのは、我々が幸福だと云ふことを知らないからなのだ』と。然し私が直ちに、

ドストエフスキーの言葉を以てあなた方の前に臨むことは、それは餘りに慘酷なやうにも思はれますが、其處には汲むべき何等かの人生の眞理のあることを感得せねばなりません。無論逆境は事實に於て飽くまで逆境たることは免れません。然しながら逆境を目して、單に救ふべからざる此世の損失若しくは不幸とのみ思ひ定むることは餘りに浅い人生の見方ではないでせうか。成程逆境は私ども人間にとつて決して自ら求むべきことでないし、又人生にとつての悲痛事であるには相違ありません。然しそれと同時に逆境の底を通して光明の道に到達することは、遂に絶對に此世に於て許されざることでありませうか。私は必ずしもさうであると思ひません。

逆境には一面に於て多くの教訓があります。或意味に於ては其處に大なる恩寵があるとも思ひます。たとひ眼の見えない人でも、若しくは耳

の聴えない人でも、靜かに我々人間の魂の眼を開き魂の耳を傾ける時、其處に偉大なる何物かゞ映り何物かゞ聴えぬでせうか。そしてそれは一人其人の持つ心靈の偉大性と生命感に對する強烈なる把握力によつてのみ唯觸れ得るのだと思ひます。たとひ逆境は誰人も望ましいことでないとしても、一度逆境に立つた以上、私どもは其體驗を生かして更に深く強く人生に生き行くこと必ずしも不可能のことではありません。

ソロモン王は云ひました。『よろづの物は勞苦す。人これを云ひつくすこと能はず』と。然り人生には、たとひ眼が見えても耳が聴えても、其處には云ひつくすことの出来ない多くの悩みがあります。そしてそれは獨り人間のみならず鳥獸蟲魚にさへも尙且あるので、かの古歌にある『ただ見れば何の苦もなき水鳥のあしにひまなき我が思ひかな』と云ふのは、之こそ恐らく自然人生のあるが儘なる眞の姿ではないでせうか。

さはれ口では何と理窟を云つて見たところ、現前の事實として不幸は不幸であり逆境は逆境である時、誰か其事實を否定し去ることが出来るでありませうか。之はまことに悲しい事實であります。然しながらそれと同時に逆境が人間としての體驗と試練の上に、如何なる意義と結果とを齎してくれるものであるかを靜かに考へる時、眞の人間としての意氣と魂とを所有する者は敢然として奮起するところなくてはなりません。不幸も逆境も單に之を不幸とし逆境として見る時、それは唯あるが儘の事實であるばかりで他の何物でもありません。然しながら其人にして眞に深刻なる感受性と強烈なる反撥力と、そして心靈の偉大性とを把持して居る時、それは單なる不幸であり逆境ではありません。我々は決して『憂きことのなほこの上につもれかし』と希ふべきでないでせう。然しながら一旦運命として我が身の上に降りかゝつた苦難に對しては、人は

敢然として『限りある身の力試さむ』と心の底から強調すべきであると思ひます。

六

そして私が前に云つたドストエフスキの『我々が不幸なのは、我々が幸福だと云ふことを知らないからなのだ』との言葉の裏を實現するには、先づ第一にあなた方があなた方の境遇乃至事實の改まらむことを思はむよりは、衷に省みて心境乃至態度の改まらむことを深く心懸くべきであると思ひます。そしてあなた方が眞に『我も神の寵兒である』と感じ得る時、あなた方は初めて自己の運命を信じ得るでありませう。そして大死一番自己の運命を信じ得て、其處に又初めて眞の人生の無限性を生き得るでありませう。

光の世界へ

私の心はいま絶望の法悦に充たされて居る。もとより之までとても私の心は絶えず光の方へと喘ぎつゝも歩みつゞけて來たのであるが、私はほんたうの意味に於ての宿命と云ふものを信ずることが出来なかつた。又ほんたうの意味での慈悲と云ふことをも知らなかつた。されば徒らに微塵に囚はれて心身を銷し、迷妄に執はれて衆生に遠離し來つた過去の愚かさを思ふ時、私は心の奥から一時に暗くなるやうな氣持がされる。然しながら絶望は滅亡ではなかつた。そして一切の運行と苦難とは、要するに自己をして眞の人としての精進を積ませるが爲の大試鍊であつたことを痛感する時、洵に光顔巍々として我が前に立ち給ふ佛陀の御姿を

七

そのまゝに仰ぎまつることが出来るのである。私は此意味に於て、今更此苦難と絶望とに此身を遇はしめ給ひし、因縁の尊さを思はざるを得ざると共に、此世に忍び得ざる絶對の試練のなきことを、心よりして感謝せずには居られない。

絶望の法悦とは是れ聽て他力本願の謂ではないか。此故に一度自己心内の迷妄が拂拭されて眞如の光を仰ぐ時、人はほんたうに眠れる魂を呼び起される。尤も今までとても絶對に此法身を感じせぬではなかつたが、眞に苦難と絶望の底に立たなければ、大慈大悲の靈光に照破し得られぬは凡夫の免るべからざる約束である。徒らに差別を設け好惡に依り形式に墮し小我に囚はれた過去迷妄の姿に思ひ入る時、私はしみじみ自己のあはれさを歎かざるを得ざると共に、而も其碎けたる魂が、眞に一如となつて絶對にして無條件なる佛陀の大光明の中に躍動する時、げに

法界平等即心是佛の大功德の前におのづからにして拜跪せざるを得ない。そして茲に初めて法身の活現を見、眞に人としての自覺を精進との意義を明かに體驗し得るのである。

洵に眞實の三世十方を通じ、佛陀は如何なる時所にも現はれ給ふのである。然しながら眼眼を見ず、刀刀を切らざるが如く、自己心内に於ける法身の活現を徹見し得ることは我等凡夫にとつて至難のことであつて、而も一度體驗し得たる即心是佛の自覺をば、更に自覺より覺他へ、覺他より覺行へと進むことは正に至難事中の至難事に屬する。然しながら自己心内に久遠實成の佛を徹見したる者にとつて、そは如何に荆棘の道であらうとも、足に血塗つて遂に到達せねばならぬ娑婆無上の樂地であらねばならぬと信ずる。そして一切衆生の無明を照らして常住不變の彼岸に導くもの、是れ即ち佛陀の大愛であつて、私は此大愛をば宇宙

萬有生命の根元たる『光』の本質を以て象徴したいと思ふ。かのシメオンは耶蘇を見て『我が目既に萬民の前に設けられ給ひし救ひを見たり。これ異邦人を照らさむ光なり』と云つたが、私は佛陀に於て更に深遠絶對の光を見得るやうに思ふものである。

そして其光こそは洵に永遠無盡の法性の活現であつて、同時に至誠實成の大功德であらねばならぬ。かの貧者獻燈の法話の中にある、阿闍世王が佛陀に捧げた燈明の其夜の中に消えてしまつたにも拘らず、何故か一貧者の獻燈のみは黎明に到るも猶消えず、阿難が消さうとした時、光耀益々輝きを加へ、法燈煌々として遂に三千大千世界を照破したと云ふことは、是れ洵に法性無盡の覺證と至誠實成の眞實を語るものでなくして何であらう。斯くの如く至心の光發するところ、すべて是れ見釋迦牟尼佛であつて、地上一切の物、一木一草の微と雖も悉く是れ法身の活現

にあらざるはない。唯衆生は迷妄に驅られて心の窓を鎖し居るの故を以て未だ此無窮の大靈光に接見し得ぬので、宇宙に於ける常住不變の本體は一切を通じて藏せざるはないと云つてよい。然しながらそれは妄りに音聲や色相を以て計度することの出来ぬもので、眞の正覺は言語道斷心行所滅の境にあるので、嘗て佛陀が數多の聽法者の前に金波羅華を拈つて見せられたところが、多くの衆生の其何の故たるかを知り得ざりしに拘らず、迦葉尊者のみが獨り佛陀の顔を仰いで嫣然笑つたので『我に正法眼藏涅槃妙心實相無相の法門あり、摩訶迦葉に附屬す』と仰せられ、多くの御弟子の中から、迦葉尊者を相續者に選ばれたと云ふ話の如きに至つては、實に法身の活現自在にして佛理の微妙なるに驚かざるを得な

す。

之を譬へば佛陀の教示は、かの宇宙を流るゝ光波の如きであつて、其

普遍的なる點に於て又其永續的なる點に於て他に比類すべきものありとも覺えない。洵に三世十方に遍照して不斷の活現を爲すところに億劫無量の生命がある。我等凡夫と雖も一度歸依すれば心身共に大光明を放ち、其處に久遠實成の佛を接見し得ること敢て難きでない。そして其處には大慈大悲の涙に濡れた魂が、本具の靈性に歸元して一切を攝受する。斯くして私の魂は忍苦と艱難の間を縫うて飽くまで『光の世界へ』と精進する。

使命の爲に

神は名もなき野の小草にさへも、それ／＼の使命を與へ給うた。況んや私ども人類には、それ／＼個々の尊き使命が賦與せられて居るので、それが如何に貧しい天分の者でも、また如何に悲惨なる境遇に在る者でも、それには必ずや、独自の責任と目的とが負はされて居なければならぬ。従つて私ども人類の一成員として、自分でなければ爲し能はぬ一種独自の個性を持つて居る者は、如何なる場合に於ても、それは斷じて他人の手段となり又單なる生活の方便となつてはならない。されば私どもにして、一度賦與せられたる独自の使命を自覺する時、其處におのづからにして一種の創造的生活が産み出され、其處に權威ある一人格が構

成せられるのである。

そして無限より無限へと果しなく流るゝ永劫のタイムの間に在つて、其賦與せられたる独自の使命を果さうとする者は、人類の一成員として其個々に恵まれたる刹那々々を完全に生かすことによつて、眞に其生が有意義となるので、其處にこそ初めて曇りなき永劫の愛と無限の叡智とが創造せられ、不自然より自然へ、固定より流動へと力強くも生命の流が押進んで行くのである。人類の中に一人だつて無意味に生れて來る者のないことを考ふる時、それは必ず其人でなければならぬ使命を負うて來て居ることは餘りに明白であつて、私どもは先づ何よりも私どもの眼を明るゝ方向に注がねばならぬことを思ふもので、たとひ假に私どもの生れは如何につまらぬ人間であつたとしても、其中に潛む眞に人類の至上を求むる人間的な心の流は、必ずや永遠に繋がるものがなければなら

ぬと信ずる。

而も私どもが一度現實に直面して、自己の完全なる努力を試みやうとする時、何人か自己の力の餘りに弱小なることを思はずに居られやうか。そして所謂宿命なるものゝ強大性を拒否すること出來やうか。然しながら私どもには一面此宿命なるものゝ存在を認容すると同時に、他の一面之に對して打開を試みやうとする能動的なる自由性の在ることも事實でなければならぬので、遺傳や環境に對抗し絶對的尊重に價する自由意志の懸命なる努力は、過去一瞬前の結果たる現在をして又よく未來一瞬後の原因たらしめ得て、之を輝かしき創造的生活へと導き行くのである。そして人類が永遠に負はされたる惱みの底をば、淋しくも而も明るく流れて居る意志の自由性こそは、如何に私どもの人間生活にとつて、新しき明日の創造的自我へと、躍進の勇氣を鼓舞してくれるのではある

まいか。

自覺と云ふのは、換言すれば使命の意識そのものであつて、人類の一成員たる私どもが、其独自の個性はもとより他人の爲に絶対に抗ぐべきでないけれども、一成員たる其自己が全組織體たる人類の爲に全眞を獻げやうとする時、少くとも人爲的に人類の苦惱を持續し、若しくは増大する制度や社會惡に對し、敢然起つて之を排撃すべきはもとより當然のことであつて、之こそは眞に人類個々に賦與せられたる独自の個性を發揮するものであると同時に、最も高貴なる意味に於ての使命感の遂行そのものである。もとより人類の悩みは、たとひ世界の最始から在つたとは云へ、私どもは協力して此悩みを少くすることをこそ心懸けねばならないが、人爲的に此悩みを大きくすることは、それは同じ大地に呼吸する人類の誰もにとつて斷じて許さるべきことでない。

トルストイは『我等何を信ずべきか』の結末に云うて居る。

『我が生命、我が眞理、我が光明は、我が同胞の蒙を啓く爲めにのみ私に與へられてゐるのだと私は信ずる。我が眞理に關する智識はこの目的を果す爲めに私に貸しつけられてゐる才能だと私は信ずる。又その才能は、これが燃えてゐる時のみ火となつてゐる火であることを私は信ずる。我が人生の唯一の意義は、私の衷に存する光に依つてのみ生きて行かねばならぬ。さうしてその光を、人々が見ることの出来るやうに彼等の前方に高く掲げなければならぬ、といふことに存すると私は信ずる』

若し私どもにして眞に全人類に對する愛と責務とを感ずるならば、それは決して徒らに自己の弱小に失望してはならない。そして靜かに退いて、其弱小なる自己が果して如何なるものを握つて居るかを心より考へ

て見るがよい。苟くも正しい念願に出發して居る限り、其祈が達せられないと云ふことは斷じてないので、それは要するに其人の抱く念願の深さと強さによつてのみ解決せられるのである。

ロングフェローは歌うて云つた。

『征服すべからざる意志の星は我が胸に昇りぬ。靜平果敢にして寂然不動たり』

と。私どもには唯一つの生命しか賦與されて居ない。そしてそれは飽くまで自己の使命と信ずる一つのものに投げ出すべき爲である。

自我の根本意志

『我』と云ふ一我がある。而も未だ嘗て我自らの意志によつて造り出された『我』なるものがあらうか。思へば我等の生命乃至存在は竟に我が自由意志以外の所産であつた。それは絶対者であつても神であつても構ふところでない。果然我は竟に或意味での一の犠牲者であつた。

遠く生命の本源に溯つて其意義と起源とを考ふる時、我等の結論は常に生命は唯我等にとつて既に與へられたる絶対の事實であると云ふことの一事に歸する。生の創造と云つても、所詮は此與へられたる生命を以て與へられたる生命を創造してゆくことの謂ではあるまいか。されば所謂生の創造はもとより、たとひ生殖と雖も、つまりは既存の生命を以て更

に新たなる生命を創造するものであつて、人類乃至生物と云ふものゝ上より見たならば、創造と云ふよりも寧ろ進展と云つた方が適切であるかも知れない。ベルグソンの如く直感によつて、流れて瞬時も止まざる生命を進展開發させてゆくことも、無論生の創造には違ひなからうが、唯一無二なる絶對的生命の創造は、之を獨り元始の迷霧にのみ求めざるを得ない。

然しこんなことは所詮どうでもよい。我等の一我は既に我等に於て與へられたるものなる以上、又は我等にとつて絶對に動かし難い人生の事實である以上、我等が人生に於ける唯一の道は、唯此與へられたる生命、否現在我等が如實に所有する生命を唯其本源の意志によつて無限に進化向上させてゆくことより外にない。

然らば謂ふ所の其生命の本源とは何であらうか。一言にして其核心を把握すれば、それは所詮我等の生命慾と云ふ平凡にして無二の權威である一事實に歸する。我等の生命そのものは既に無始の元始より存續活動して居る以上、此生きむとする意志ほど根強く、深く鋭く旺んたる力はあるまい。それは靈であつてもよい、又肉であつてもよい。唯生命の力だ。本能にして意志、意志にして本能なる生命の力だ。そして此力の蓄積するところ、此力の爆發するところ、すべてを貫きすべてを焼く。此力は意識的であつてもよい、又直感的であつてもよい。我等は我等の人生に於て唯此力を表現し得ればそれで足るのだ。藝術も哲學も宗教も道徳も政治も經濟も教育も産業も一切はこのライフ・フォースの發現に過ぎない。

そして我等の此生命慾をして、眞に徹底せしめ充足せしむる唯一の道は、唯我等をして我等自らの意志に生きしむると云ふことによつてのみ

得られる。蓋し自我とは此生命慾の更に一層熾烈に、而も智識的に進化發展せる綜合的意志そのものであつて、我等が生活の進路は常に此光によつて照らし導かれて居ると共に、我等が全生活の核心は實に自我そのものによつて把握されて居る。

生命は動物に在つては單なる一の盲目的衝動に過ぎないが、而も智識的な我等人間の高等複雑なる精神的生活に於ては、生命は聽て自我と云ふ一の自由なる生活意志となつて、一切を思ふがまゝに批判し思ふがまゝに遂行して行く。其處に我自らの旺盛なる威力の發現があり、眞實なる生命の把握がある。そして其意志の發動するところ、すべては悉く生命の活躍そのものであつて、苟くも自我の欲する所は、たとひ死と雖も之を轉じて赫灼たる生命の力たらしむることが出来る。自我は實に我等が人生に於ける最深最強最高最大の綜合的の力であると共に、元始以來

流動活躍し來れる我等の生命そのもの、象徴であるとも云ひ得る。

斯くして窮極するところ、自我は我等が熾烈旺盛なる自覺的生命慾の焦點であり核心であつて、そして又我等が生命は我等の自由意志によつて造り出されたるものにあらざる以上、我等が生命慾の絶對に自由なることとより其所である。されば一定の型の上に盛られたる皮相な既成道德の如き、必ずしも我等の前に權威あるものであるとは云ひ得ないで、我等にとつて眞の價値ある道德なるものは、自我を根抵とした我等が眞生命の慾求に發足せる人間性の現はれでなければならぬ。

古來我國には、近松の作物などによく出て來る所謂『義理なる言葉があつた。然しながら其義理なるものは眞の意味での果して道德であり得たかどうか。それは彼等の心よりして發足せる犠牲、即ちウキリング・サクリアイスならばいざ知らず、然らずして單に所謂世間の手前と云

ふ囚はれたる意味での犠牲であるならば、それは決して其人個人の真正の道德であるとは云はれない。即ちそれは徒らに空しき彼等の形骸であつて、切れば血の出る彼等の肉體乃至魂とは別なるものであるからだ。換言すればそれは強ひられたる犠牲であり、そして又一種の無智なる殉教者の憐れなる一盲動たるに過ぎないので、眞の道德なるものは飽くまで個人の自由意志の發動に待つべく、それは斷じて他から強ひられたる性質のものであつてはならない。

然らば我等は、斯く絶對的なる自我に根抵せる自由意志に發足し、何等他の制肘拘束なくして、果して圓滿なる人類の共同生活體を維持進展せしめてゆくこと出来るかどうかと云ふことになるが、もとより人が神になり得ざる限り、我等が人生には、個人それ自身の内部生活に於て、又人と人との間に於ても、其處に矛盾、扞格、撞着、衝突の盡させぬも

のあるであらうが、而も再びすべからざる我等の人生に於て、眞の人間の自覺に眼醒め、全我を擧げて人生の眞實を追求せむとする者の魂はそれは我等人類の行手をして更に益々明るくこそすれ、決して之を暗きに導くものでない。斯くしてたとひ我等は我等の意志の絶對なる自由性を強調するとは云へ、而も我等が一切に對し絶對なる自己の自由を主張すると云ふことは、同時に又一切に對し絶對なる自己の責任を負ふと云ふことの謂に外ならない。

されば我等の主張する自我に發足せる意志の自由性は、之を本質的に見て個人主義を其足場とするとは云へ、而もそれは利己主義を意味する所謂個人主義にあらずして、まことは我等の世界なるものをして誤られたる皮相の道德乃至文明より救ひ、眞の人間性を足場とする金剛不壞の基礎に樹てむとするにあるものであつて、従つて我等の自我を根抵とす

る意志の自由性を強調することは、我等が眞の犠牲や利他や並に國家や社會に對し、更により深くより強く考ふるが故にこそ之を云ふものに外ならぬ。

之を譬はゞ、一個の偉大なる自我の覺醒は恰も一の大なる燈明臺の如きであつて、其燭光の強くして高ければ高い程、其光力の及ぶ範圍が廣大に、以てキリストの云ふ世の光とはなるので、此意味に於てキリストの十字架も楠正成の湊川の討死も、それが人々自ら進んで行ふところの熾烈なる生命慾乃至自我本然の慾求である以上、之を或意味に於ての徹底せる個人主義乃至自己實現主義の現はれと見ることが出来ると思ふ。

古來無數の人々が聲を涸らして愛や犠牲や道德を叫んで居るにも拘らず、其歩みの遅々として振はず、時に却つて文明の進歩と逆行せむとするは、是れ其主張の眞に自我を根抵とせる思想の上に築き上げず、徒ら

に皮相な理想論に囚はれたる爲である。斯くして我等は過去に於て幾度か悲しむべき砂上の樓閣を見たのである。

今や我等は我等の明日の世界の爲に一大燈臺を建設するに當り、強風激雨はもとより、たとひ如何に萬里の波濤が一時に逆巻き寄せても、微動だもしない牢乎たる巖の上に其足場を占むることを先づ第一に心懸けなければならぬ。斯くして眞の意味に於ける自我覺醒の炬火は高く人類の行手に掲げられ、其處に世界は初めて搖ぎなき確實の歩みを進めることが出来るであらう。

北國より

保持さん

其後は御無沙汰して居ります。

此夏平塚雷鳥さんをお訪ねしての歸るさ、染井の杜に物語つたのは昨日のやうにも思はれますのに、こゝ北國の天地は満目荒涼たる雪の世界となつてしまひました。其後私は毎日慌しい生活を送つて居りますが、一言にし云へば新しき自己に生き返らうとする準備であります。

平塚さんのことに就いては此處に批評がましいことは避けませう。然し平塚さんは自我の強い理智の透徹した聰明な女であることだけは事實です。私はもとより今の平塚さんの思想、行爲の全部に共鳴を感じるも

のでありませんが、然し個人主義と云ふことは果して一概に卑しむべきことでせうか。あなたは或は私の個人主義と平塚さんの個人主義との間には、可なりの逕庭あるやうに思はれて居らるゝかも知れませんが、然しそれは本質的には結局同じきものでないでせうか。あなたはいつか私が『第三帝國』に書いた『自我の根本意志』を御覽になつて、私の個人主義を比較的博大な高遠なものゝやうにお取りになつてゐらしたがつたが、然し出發點が『我』と云ふ一我にある以上、窮極の意味に於てすべては自己の欲求と云ふことになりませう。唯私は自分と云ふものゝ態度をして常に飽くまで眞實であり晶明であり、そして又個人と全體とのハーモニーに基調しつゝ、犯されざる自我の獨自性を發揮したいと心懸けて居ることだけは事實であります。

保持さん

愚かしきは實に我が來し方であります。私はいつでも前途を望む時其如何なる場合に於ても、常に一種の勇氣と希望とを感ずるのでありますが、一度過去を顧みる時に未だ心中汪然として泣かざることありません。尤も今までとても、多くの場合私は自己の歩まうとする道を心懸けては參りました。然しながら眞の自己に眼覺めざる痴者の歩みの、今にして思へば愚かにも悲しき極みでありました。青春のこと多くは羞耻と悔恨であるとは、必ずしも私一個に限つたことでないでせうが、それにして生命力の餘りに微弱な輕浮な、フラ／＼腰の私と云ふ人間の姿に思ひ到る時、唯心の底より自棄の涙がこみあげて來ます。不眞面と云ふよりは、性格的な生命力の微弱乃至はお人よしであります。私は今更事新しくアンチ・クライストなどと叫びますまい。然しながら今の私は一個火の如きニエチャンです。少くとも純なる態度に於ける一個のエゴイ

ストです。私は尊い自我の爲には一切を破壊しても、其眞實一路の旅を辿らねば己まぬものです。

保持さん

人は功名を夢み、或は戀に憧がれて居ります。然し此世の功名や戀や果して何を與へてくれるでせう。永へに變らず絶對なるものは、唯『自己』だけです。私の心は今ツルゲーネフのルーヂンやバザロフのやうな境地に在ります。つまり覺めたる者の悲哀です。酔ひたくとも酔ひないです。氷山の上にぐるぐると廻る太陽のそれです。そして燃えながらもマイセルフ・アロンです。私は唯此間に在つて科學の示すプレサイスニスを認めます。然し渾身に生の熱血が脈打つて居る生きたる人間が、冷かなる科學のみで満足出來ないことも亦事實であります。そして文藝なるものも單なる筆先の遊戯であるならば勿論、たとひそれが價値ある仕

事であるとしても、實際的意味に於て天分の薄い私などの生を託すること出来ぬもので、此場合私の進まむとする道は唯一つ自己の人生そのものをして一個の藝術たらしむるにあるだけだと思はれます。私は廣い意味に於て、人生そのものを一個の藝術と觀て居るもので、此意味に於て一言一行は其藝術の各個表現であり、たとひ筆を折つても活字を絶しても、苟くも自己生命の存續するところ、其處に私自身の藝術があると思ひます。私は唯此藝術をして飽くまで晶明玉の如く、而も匂ひ高さものたらしめねばならぬと念じて居ります。

保持さん

指を屈すれば、はや八年の昔となりました。風暖かき湘南・南湖の海邊にあなたと知り合つてから、當時の某々君等はもう杳として消息（文學好きで明星の愛讀者であつたK中尉からは折々消息ありましたが、そ

れも今はありません）ないに拘らず、あなたとのみが斯くして清く眞實なる友情を續けて來て居ることは、之が攝理とでも云ふものでせう。丁度四十一年の今頃でありました。私は一寸した動機からして、郷里から十里足らずのとある山上の温泉に籠つたことがあります。其時の印象記に荒涼たる雪山の背景より思ひ付いて、新聞で見た平塚さんの鹽原行に論及し、平塚さんに對してあなたを引合ひに書いたことありますが、後で平塚さんとあなたとの間柄を知るに及び、之又奇縁に驚かされたのであります。

平塚さんと云へば、嘗て『青踏』創刊號に平塚さんが書かれた『原始女性は太陽であつた』と題する一文は實に敬讀に價する文字でありました。當時世間はあなた方をば所謂『新しい女』として嘲笑の意味で遇したが、然しながら眞に尊い自我意識に眼覺めて、人生に於て自己に對す

る最高の義務を果さむとするあなた方と、之を物見遊山的に『新しい女』として弄ばむとする世間とは、果して何れが輕佻であり又遊戯的であるか、云ふさへ愚かしい話であります。女子大學當初の選まれたるあなた方が青踏社を起して、時代の先驅者としての女性の行くべき道を高く標示せられたことは、たとひ其間に多少の若さはあつたにせよ、我國の女性史並に文壇乃至思想界にとつて不滅の仕事でありました。

たしか『青踏』三週年記念號だと思ひますが、生田花世さんは私の云はうと思つて居つたことを最も適切に云つてくれました。それは『弱者が最も強き生き方をすることが出来る』と云ふ感想中の一節でありました。私は此意味からして、ずうと以前からショーペンハウエルを生來の強い人、ニエチエを生來の弱い人と思ひ定めて居りました。弱者の強がりとはまことに醜いものです。然し個人の純粹なる意慾に基いての、弱

い者が強くならうとする眞劍の努力、それはたしかに尊ぶべきものであると思ひます。眞實一路生命の行進、私の歩みは唯之に盡きます。

最後に書きます。

今に思ひ出しても懐かしい南湖院の思ひ出、そして今に依然として續けられて居る高田老先生や河野先生のあの涙ぐましい人類に對しての奉仕、私はクリスチャンではありませんが、然しあのやうな崇高な眞實な生活乃至生涯を見る時、私の頭はおのづから下り、眼がしらが熱くなるやうに感じます。毎年のクリスマスに案内を受けて居りながら、なかなか行きかねて居ります。

では、御自愛を祈上げます。



庄内に旅して

安藤先生

生れて以來、夢寢の間にも忘れなかつた、母の生地であり、私にとつて一面の故郷たる鶴岡の地を初めて踏んだのは、九月九日の午後で御座いました。そしてそれは又私が農會長としての初めての試みたる純粹の農事視察旅行でありました。

私の鶴岡に就いての第一印象は、一般人心の素朴であること、未だ所謂文明の空氣に染みて居らないことでありまして、之は獨り鶴岡のみならず、庄内を通じての傾向であると云つても宜しいやうです。御存じの風間幸右衛門氏の如きは、酒田の本間家に次ぐ豪家ですが、それでも

平素は森閑として、秋田邊の富豪の大臺所に見る如きドヤ／＼しさがなく、一言にして云へば質實敬虔そのもので、朝はお粥で年中一日と雖も佛壇に御經を上げることが怠らぬさうです。此等は母が奥様と従姉妹の關係からして、鶴岡に參ればいつも厄介になつて來るので始終見聞し、歸つて來てはよく私どもに、其床しい家風を話して聽かせるのですが、此等を以てしても如何に其氣風が素朴であり、志操が堅實であるかと云ふことが分ります。丁度九日の夕方私の伺つた時は、主人は鳥海山二十年御立替遷座式に知事一行と共に登山して留守でしたが、奥様は主人の登山中、留守宅では一切精進潔齋をして居るので、折角初めての御出であるのに御飯も差上げないで残念であると語られました。此等は一面舊式と云へば云はるゝものゝ、私は寧ろ其心懸けの眞實にして物堅いのゝに、ゆかしさの情を禁ずること出來ませんでした。

それから更に驚きましたのは、翌十日の朝初めて御殿（酒井伯邸）に上りましたが、其質素なることでありました。初めて舊主君筋に御目通りするのであるからと云ふので、こちらはフロック・コートに威儀を正して参りましたところ、殿様には一寸した飛白の單衣に兵兒帯をしたまゝ、足袋も御召にならずに御遇ひ下さいましたには、こちらが却つて恐縮したやうな次第で御座います。

農事視察に關する細かい専門的のことは抜きにしまして、大體に就いて考へて見まするに、庄内三郡があつたやうに農事が進歩したことは、土地氣候に加へて一般人心の素朴勤勉なる外、舊藩主たる酒井家が、心を早くより領地内の人達の爲に碎かれ、郷土の休戚に就いて深く御考へになられたことに與つて力あると思はれます。（一面に於て本間家の施設影響も頗る多いので、今回私どものは同家農場を視察して其管理の行届け

るに敬意を禁じ得ないのでした）かの有名なる山居倉庫の如き、元和八年に酒井家が信州松代から庄内に轉封せられた際、既に米券制度を採用され、之が現行はるゝ米券法の濫觴であつて、爾來多少の變遷あるも數百年來連綿として續いて來たものであるさうです。（最初は七つ藏、即ち鶴岡城郭内に在る七棟の倉庫藏と、新井田藏、即ち酒田新井田川に沿ふ二十五棟の倉庫でやり、山居倉庫となつたのは、つひ明治二十六七年からのことださうです）昨今農業倉庫問題が俄かに斯く喧しく論ぜらるゝ時、三百年の昔に於て、既に米券を發行して居つたなど驚かざるを得ません。

近頃になつても、今の伯爵の父君に當らせらるゝ忠篤様には、御維新の際、領内士族の生活と鶴岡の前途とを御心配になり、鶴岡の近郊後田山を開墾して桑園を經營せられ、自らモンペを穿いて士族達を督勵し、

盛んに蠶業を奨められたと云ふことであります。此方は其後洋行をせられ、而も質實ななか／＼の名君で、庄内の産業並に一般の氣風に直接間接貢献せられたこと頗る多いさうです。母の祖母が御乳を上げ、始終御側で御仕へ申したのは此方で、つひ一昨年御亡くなりになられました。が、此方の後田山に於ける淺黄のモンペ姿は、折々母によつて聽かされたものです。

尙御知らせしたいのは、高山樗牛の生家を訪づれ、親しく實父の方に御目にかゝり、しみ／＼樗牛のことども語り合ひたる、私にとつてまことに感慨に充ちたる印象で御座います。

丁度十日の午後でありました。自分は鶴岡に少し用事もあるので、一泊の上、明日酒田で落合ふこととし、一行を湯の濱に赴かしめたる後、獨り車を急がして、豫て聞き及べる大寶館なる樗牛の肖像の前に立つて

靜かに一揖した時、私は今更ながら此偉大なる天才の佛に胸とゞろきを禁じ得ませんでした。日曜で人も居らなかつたので、私は留守居の人と樗牛に就いていろ／＼のことを話し合ひたる末、實父の方が高畠町に居らるゝと云ふことを聞いたので、何となく御目にかゝつて見たくなり、それから夕陽の街を更に車にゆられて道幅狭き士族町に入り、齋藤親廣と云ふ名札のかゝつた古めかしい、而も氣持よい邸の前に降りた時、私の胸は何か云ひ知らぬ一種の親しさがこみあげて來るものでした。(親廣と云ふのは一番上の兄さんの名で、今關東州に勤めて居らるゝさうですが、實父の方は親信と云はれます。『わが袖の記』にある姉上、良太並に信策——野の人——等同胞は殆ど亡くなつて居りますが、末弟が今高等學校の法科に居らるゝさうです)

私は門をくゞり玄關に立つて案内を乞ひましたが、突當りの部屋が御

父様の御部屋らしく、丁度折よくも御在宅になられ、私がかね／＼樗牛を慕うて居ることを申し上げたら、さも満足げな面持でさまざまのことを御話になられ、樗牛の大學卒業證書や文學博士の授與證や、其他故人の書かれた軸物やらを見せられました。御父様の佛が樗牛に似て居る上に、部屋にはぎつしり樗牛が生前の愛讀書を列ねて居つたので、私はさながらに在りし日の樗牛その人に面接する心地いたされたのでありました。殊に同じく士族町のこととして、母の伯父の名などよく覚えて居られたるには、まことに云ふばかりなき懐かしさを感じました。

實に高山樗牛こそは、近世我國文壇の上に輝ける一個の明星であつて世上幾多の文學青年の渴仰の的となれる宜なる哉と思はれます。人によつては樗牛を文明批評家として多少冷靜を缺いたと云はれる向きもありますが、而も偉大なるロマンチストとしての情熱と高邁なる識見と、

自我に立脚せる熾烈の其意力とは、確かに群小を抜ける高岳のそれであつたと云ひ得ます。そして彼が享けたる三十二年の生涯は、之を永遠のタイムに比し一瞬に過ぎないが、彼が天才として明治文學史上に曳いた光芒は燦として永へに不滅であると思ひます。そして又樗牛が、私の母の故郷たる鶴岡の士族町に生れたること、更に又私が青春東海の邊りにさすらへることなど、一層樗牛への思慕を強からしむる所以であるとも思はれます。私は歸りに御父様から樗牛の高等學校時代に書いた端書を頂いて來ましたが、其文字の老成さには驚くものがありました。

安藤先生

庄内に旅して、私はいろ／＼の意味に於て、感慨深きものあるを覺えます。

政治の思想化及び道德化

先頃 A 高等女學校に於て、文部省が命じた中等學校生徒の思想傾向の調査をした時『廢娼問題』や『戀愛と貞操』に就いての答案の外、『普通選舉に就いて』の答案を綜合して、同校長が新聞記者に語られた中に左のやうなのがあつた。

『賛成であります。財産の有無で國民の權利に甲乙あることは不合理であります。普選は實行されなければなりません。と同時に政治の道德化を望んで已まないものであります』

私は此中の『政治の道德化』をば、女學校の生徒によつて要求せられたことを、可なりの興味と敬愛の念とを以て讀んだ者の一人である。

實際今更云ふのも野暮めいた話であるが、今日の政治の何處に思想があり道德があると云ひ得るか。政治は全く虚偽であり盲目であり手段であり權謀であり、そして又酒宴であり亂舞であり利權であり妥協ではないか。然しながら斯る政治が、何時まで眼覺めたる新興勢力の前に繼續出来るであらうか。今日各政黨が競うて社會政策の美名の下に多數民衆の機嫌を取り、農村振興に對しても、例の月並的にして不徹底極まる諸看板を擔ぎ出して、只管一時を糊塗して頽勢を挽回せむと是れ力めて居るのは、まことに笑止千萬の次第ではある。

そして近時到る所に學者乃至思想家の講演會が開催せられて居るが、之と選舉に於ける所謂政談演說會とを比較して見る時、果してどうであるか。其内容乃至價値に就いてはもとよりであるが、所謂政談演說なるものに於ては、演說商賣だから我黨の政策を吹聴して無智なる民衆を煙

に卷くことはうまいが、而も選ばれたる少数有識政治家以外、所謂一般の政治屋的政治家なるものに對し、少くとも現代の智識階級乃至青年層は深き敬意を拂つて居らない。そして彼等が學者乃至思想家の言説に對し、より眞面目により熱心に耳を傾けると云ふことは果して何を意味するであらうか。尤も今日の我國に於て、思想的傾向に就いても如何さま流行を趁ふ輕佻の憾みはないが、而も現代我國政界の低調墮落に比べては到底日を同じうして語ること出来ない。即ち政界は泥試合であり選舉は錢舉であり、又一般民衆も何人が正しきかを見むとはせず、何人がウマクやつたかをのみ注目し、綱紀は紊亂に陥り議場は騷亂を繰り返すにあらざれば議場らしからざる感をすら與へるやうになつて居る。斯くして民衆の代表たるべき政治家も只管に利權を漁り、外的には芝居氣タツプリで徒らに衆愚の喝采を博せむことに吸々として、各自が眞の

責務を閑却して居るもの多い。即ち政治は依然として虚偽であり盲目であり手段であり權謀であり、そして又酒宴であり亂舞であり利權であり妥協でもある所以である。

尤も私としても政治は活き物であり實際問題であるから、所謂學者乃至思想家の言説と全然軌を一にすると云ふこと難いだらうことは分つては居るが、而も根抵に於ける思想乃至信念に至つては斷じて些の弛緩をも許されないので、たとひ政治は現實の仕事處理するにあつても、全民衆の利害休戚に係ると同時に、又未來の世界に繋がる根本的の仕事でもある。されば今や我國民衆政治の黎明に立つ眞の政治家は、自ら時代のトップを切り、正しき思想がものを云ふ時代、そして無意味なる肩書や黄金が社會的正義の前に無力なる時代を、出來得るだけ速く招來するやう懸命の努力するところなければならぬ。

若し夫れ今後の政治が思想の背景なくして行はれ得べしと思ふ政治家
あれば、是れ實に時代の趨勢に盲目なるの甚だしきものであつて、普選
はもとより、労働問題と云ひ婦人問題と云ひ、將又農村問題と云ひ、何
れかそれが密接に經濟と關聯し、思想を根抵としての啓蒙運動にあらざ
るはない。而も今日の政治家は唯徒らに民衆に引づられて行つて居るの
みで、其處に内から湧出する何等の創造的な力も理想をも持つて居らな
い。民衆を率ゐると云へば聊か語弊はあるが、民衆の行くべき彼方に高
く標的を掲げて、眞に民衆の爲に政治的信念に生くる政治家は、まことに
寥々として晨星の如しと云はなければならぬ。

然しながら今や普選の我國は既に民衆自覺の黎明期に入つて居る。そ
して今後の政治は、一に無産大衆乃至は之と思想的に靈犀相通ずる智識
階級層の向背によつて定まるものであると信ずる。そして低調なる舊式

政治家の日に日に其影のうすれゆくことを、明かに看取し得るものであ
る。斯くして思想なき政治、道德なき政治、そは當然滅ぶべき運命を辿
りつゝあるものであると云はなければならぬ。

藝術と實行

藝術と實行とは、人生に於て果して相一致すべきものであらうかどうか。古い言葉などで云ふ眞・善・美は、其窮極に於て全然相一致すると云ふが如く、此二者は其極點に於て果して同一の目的を有するものであらうかどうか。

今更めいた問題のやうであるが、一體藝術は何の爲に人生に存在するか。換言すれば藝術の目的は何であるか。之に對して人々は、人生の爲の藝術、自己の爲の藝術、或は又藝術の爲の藝術などといろ／＼に云うて居るが、然し此處に最も注目すべきことは、藝術の目的は人生の爲、自己の爲、將又藝術自身の爲等、その何れなるにもせよ、眞に權威ある

藝術の態度は、常に觀照的であつて實行を超越して居ると云ふことである。尤も過去及び現在に於ても、道德乃至功利の爲の藝術、即ち社會教化の爲の藝術、其他いろ／＼なる手段、方便の爲の藝術もあるが、然し此等は一度純粹なる藝術批評の眼を以て見る時に當り、それは決して權威ある藝術として我等の前に存在することを許されない。まことに藝術に求むるところは人生の眞實なると共に、其態度の飽くまで觀照的であることであつて、藝術は此意味に於て人生の最高批評であると共に、自然の再現であらねばならぬと思ふ。

之に對して實行は人生の眞實そのものよりも、人々の都合よく社會生活を遂げてゆくことを主とするものであつて、其態度も藝術が人生に於て、自己及び一切の自然、人事を突き放して、冷かに取扱ふ觀照の態度と異り、唯現前の實益を目的とするのが實行の態度である。されば實行

に於ては時に多少の虚偽彌縫にても、とにかく都合よく社會生活の統治を計つてゆくと云ふのが第一であつて、道德乃至法律の如きは此意味の規約に屬し、所謂文藝上の取締などは其一例である。蓋し人間の實生活にとつては、實行は一日も離るべからざるものであつて、實行の眼を以て見れば人生即實行であつて、事實藝術の如きは人生の或一局部に過ぎない。然しながら其一局部に過ぎざるが如く見ゆる藝術の天地も、一度冷かなる觀照の眼を以て自然、人事の一切に直面する時、我等は其處に眼も遙かなる絶對無限の領域を發見することが出来る。此時に於て藝術と實行とは最早同一の世界に在るものでない。是れ同じく人生の事實なるも、一は觀照の態度を以て人生に臨み、一は實利の眼を以て人生を見るからである。

斯くの如く其態度並に目的の同一ならざる藝術と實行との、人生に

於て時に相背馳するものあるは又已むを得ぬことであつて、此二者は往々にして同一線上に引かれたる二平行線の悲しみに在るが如くにも思はれることすらある。然し斯く云へばとて、藝術は好んで反道德、反實行の道をゆくものにあらざること勿論であるが、唯同一の態度並に目的を有せざる二者の間に相扞格するものあるは又已むを得ぬ次第である。即ち嚴密に云へば、藝術は人生の最高批評であると同時に自然の再現であれば、藝術それ自身は其感化に就いて顧慮するところなく、唯藝術自身の目的たる觀照の態度に終始すればそれでよいのである。

然しながら此處に特に述べて置きたいことは、藝術は其本質に於て飽くまで觀照的態度であり、それは第二義諦に墮ちたる、廣き意味での實行の世界、即ち道德乃至は社會教化の爲の隸屬の意味に於て表現さるゝものでないが、而も藝術は一面常に社會と關聯し、又時代の影響を受く

ることは勿論、優れたる藝術は人生に對する偉大なる理想を其中に包含し、其藝術を通して人類の社會生活の進展に寄與して居ることは事實であつて、かの露西亞文學に於て、トルストイの如き、ツルゲーネフの如き、ドストエフスキの如き、ゴルキの如き、何れも文藝家が其時代を通して、社會思潮の上に乗れ出し、人類の爲に輝かき業績を遺して居るのは尊敬に價すべき事實である。然しそれは飽くまで藝術の本質たる觀照的態度を堅持し、其上に社會、人生に對する眞實なる理想の下に表現せられたるもので、所謂單に實行の爲に隸屬の意味で取扱はれたる第二義諦の藝術とは、おのづからにして雲泥の相違がある。

我等は此意味に於て、一面人生に於ける實行の世界をも重視するものではあるが、而も他の一面藝術の理想を追ふ時に當り、それは飽くまで觀照的態度の高揚を強調せず居られない。

原始生活の追慕

原始生活の追慕は、一面に於て日光の追慕である。

私は四季を通じて盛夏の烈日を除くの外、閑ある毎に日光の射す所を選んで身を置くのを常として居る。裏畑の空地、庭園の片隅、田圃の畦畔、野原の眞中、さては便所の側、泥溝の邊りでも、苟くも日光の射す所は決してためらふことがない。荒蕪の上に机を据えて仕事をすることもあれば、時にはノートとペンとを携へて郊外に出で、數時間、半日乃至は終日をも過すことがある。そして餘り人通りのない所、又寒くない時には多くの場合素ツ裸となつて肌を日光に曝す。實に私にとつて人生に於て最も快く又最も強い生の躍動を痛感するのは、常に太陽に直面

●して我の全身全靈が其絶大なるエネルギーに打たれる時であつて、そして私は此エネルギーの中に、眞に原始の健康と自由と幸福とを認むると同時に、地上一切の生命は實に此エネルギーと相交感し相抱擁し合ふ時に於て最も強き生の爆發を意識し得ると思ふ。

以前に於ける私の日光浴は、單なる衛生上の一手段に過ぎなかつたのであるが、いたくも近代の思索に疲れはて、飢え渴くが如く原始生活の強さと大きさを慕うて居る此頃の私にとつて、太陽は實に靈肉すべてを通じての私のエホバとなつた。一日私が郊外の青草に寝轉んで、今更に疲憊し切つた此心身を顧みながら、空の鳥や野の獸の如き如是眞實の心に生き返らうと思つた時、おのづからなる涙の頬に照りつくる太陽は流石に痛かつた。斷るまでもなく私の云ふ如是眞實の心に生き返らうとは、私どもの生命乃至生活をして未開無自覺のそれにまで引き戻さうと

の意味ではない。然しながら私どもは現代の人として生きる前に、先づ眞の人間乃至健康なる人間として生くるの要がなからうか。更に一步を進めて、眞に健康なる動物として生くるの要がなからうか。日光と土の香とを忘れたる所に、其處にどうして眞實なる人間の生活が在り得やうぞ。

私は現代の人々の多數は今少しく智巧と虚飾とを去り、其血液をして原始に還らしむべく、頭を擧げて此絶大なるエネルギーに直面するの要あるまいかと思ふ。

太陽の子・ゴッホ

宇宙に遍満する光波の本源、我等の太陽が如何に地上の一切に對して
いみじき力を持つて居るか、それは餘りにも分りきつたことではある
が、而も其力の普遍的であり絶對的である爲、我等は其一切生命の活力
賦與の根源である、太陽に對しての恩恵を忘れて居るではなからうか。
そして之を科學的に研究し、日光の人類の治病乃至健康増進にとつて如
何に有益必要のものであるかを闡明せるものにフィンゼンがあり、又藝
術的にその磅礴たるエネルギーを象徴したものにゴッホがある。

斯くして我等生物の生活體との關係はもとより、晝夜の變化、春夏秋
冬の自然推移、さては雨、風、電等の氣象的變化に至るまで、一として

太陽の影響ならざるはないので、地上に於ける一切の活動力乃至生命力
の源泉たる太陽こそは、それこそ我等にとつて驚異であり神であり絶對
である。

フィンゼンの光線生物學上の功績も素より讚嘆に價するが、而も私は
光の子、太陽の子であるゴッホの藝術に對し限りなき狂熱的思慕を覺ゆ
るものである。

ヴァン・ゴッホは畫家であつた。然し彼の描けるものは形體ではなか
つた。それは光であつた、色であつた、そして又命であつた。そして彼
の身内に渦卷くもの、叫喚するもの、溢るゝもの、漲るもの、爆發であ
つた。彼の内生命が如何に光と色との錯綜亂舞の間に炸裂し、其強き熱
情的主觀が觀照する者の胸に藝術的迫力となつて驀進して來るか。それ
は一度彼の作品の前に立つ者の看取し得らるゝところであらう。

中にも彼が好んで描いた向日葵の繪、即ち向日葵が金の油を身に浴びて、ゆらりと燃えながら陽に傾き咲いて居る狂熱的なポーズ、否光と色との交錯せる彼が強い主観と個性とのハーモニーよ！ 私は其處に最も色濃き彼自身の自畫像を認むると共に、限りなき人類の幸福と未來の世界とを豫知し看取することが出来る。

洋々として億兆に漲る光の洪水！ 而も其光によつて一人の溺るゝものなく、十方世界は之によつて救はるゝのだ。即ち其光こそは我等人類の親であり命であり實在であるのだ。そしてたとひ如何なる哲人にある藝術家にあれ、其與ふる力は光と熱との外にない。そしてそれは又叡智でもあり情熱でもある。そして又多分の光と熱とを與へ得る人ほど、それは卓越せる生活力の持主であり、又生命力の把持者でもある。

日中の眞盛でさへ一片の日覆も被らずに強い光線の下、其カンヴァス

に光と色と命とを塗りつぶしたゴッホよ！ 私は太陽崇拜の熱意を以て限りなく君の藝術を絶讃する。

民衆政治家・安部磯雄先生

私の初めて安部磯雄先生を知つたのは、明治三十七年春、早稻田の講堂に於てである。其後四十三年十月『予が理想の人・安部磯雄先生』の一文を郷里の秋田魁新報に掲げて、私が先生に對して抱懐する敬慕の情念を披瀝し、同時に書翰を添へて親しく先生に教へを乞うたのである。最初早稻田の講堂で先生を知り、各所の演說會や若しくは著書や雜誌や先生の言論文章に絶えず接して居ても、私の親しく直接先生に敬慕の誠を表したのは此時に初まるのである。其後二回ほど先生の御宅を訪づれたことあるが、爾來十數年間と云ふものは殆ど先生に御無沙汰して居つた。蓋し年一回の年賀狀や病氣見舞等の外は、社會的貢獻の偉大なる

先生に對して御妨げしなくないと思つたからである。そして兩三度遊說の爲に私の郷國に御出でになられたことあつても、いつも留守や用事の都合で御遇ひしかねた。

さて先生に關しては、早稻田大學の教授として又我國野球界の恩人として、將又産兒制限の熱心者として、殊には我國無産政黨史上の第一人者として、其誠實公正なる言論文章と共に、餘りによく世人に知られて居り、又其人格、識見に對しても世既に定評がある。今回の先生の立候補に對しても、世人一般殊に智識階級の間に、少くとも安部氏だけは出したいものだと輿論で、當時私は自分の環境の立場の上から、郷里で選舉運動に従事する間にも、私かに先生の御當選を祈つて居つたところ、其選舉區の友人からも、實際安部氏だけは議場に送りたいとは、心ある選舉區民の熱心なる意嚮であると云つて寄越した。無産黨中人多しと雖

も、先生の經歷、聲望、人格、識見に及ぶものなく、稍もすれば輕佻奇激に奔らむとするそれ等の間に、一先生の存在は實に磐石の重きを爲すものである。そして之を既成政黨に求むるも、其端正なる風格、眞摯なる言論、博愛、正義、信念、努力等の點に於て恐らく比肩すべきものないので、否土臺根抵に於てそれ等とは選を異にし、先生こそは眞に我國民衆政治の黎明期に於ける大黒柱とも稱すべき人である。まことに先生の如き誠實公正の人を我が議會に送ることは、腐敗墮落の極に達せる議會の改造刷新を促進すると共に、ともすれば徒らに奇矯に出でて快哉を叫び、空想に奔つて大衆現前の幸福を破り、無產政黨に對する世人の期待を失墜せむとする時に當つて、實に唯一適當の統率者であり指導者でもある。

世上、先生のキリスト教徒であり、又人道主義的傾向を持し、其言論

行動の穩健なるよりして、先生を目して無產政黨を統率する階級戦の戦士としてふさはしからずと云ふ者あるも、成程貪婪飽くなき支配階級に對立し、無產大衆鐵火の意氣を高く掲げて之と決戦するには、先生の傾向は熱情的であるとは云はれない。然しながら闘志満々たる階級戦の戦士の必要なると同時に、確乎不拔の社會正義感の下、不斷の努力三十年間一日の如く、我國無產大衆の自由獲得の爲に献げ來つた先生の偉大も仰がずに居られない。之を端的に云ふ時、八面玲瓏たる先生の人格は、今日所謂無產運動者の間に在つては、餘りに上品であり禮義があり、常識的であり包容力があり過ぎるとも見られる。然しながら先生は常に何人にも善意を持し、事によつては出來得る限り讓歩し調和するの人であるが、事一度自己の所信や主義の上に係つては、たとひ千萬人と雖も斷斷乎として一步も退かざるの人である。即ち先生こそは和して同ぜざる

の人で、今日殊に未成品時代の我國無産政黨に於て、先生の如き人が之が統率者たることの、一般世人より受くる無産政黨の信用と聲望との上に至大の影響ある、必ずしも識者を俟つて知るべきでない。人も先生の如きセンチメントに達すること出来れば安全なるもので、又我國無産政黨も斯くの如く清く明るき正々堂々の陣下、情理並び到つて一點の批も入るべき餘地のない時に、それは初めて如何に大なる見えざる力となつて民衆乃至一般國民の間に流れ込むか知れない。

先生の態度は何れの點より見ても紳士的であり漸進的であり、穩健であり氣品があるが、其政治的思想も即ち英國勞働黨のそれであつて、其誠實公正に何事も本格的な先生のやうな歩み方が、今後の我國政界に於て、如何に實質的に無産大衆の上に重きを爲し、又其大を招來すべきかは今より之を想見するに難くない。

英國勞働黨首領マクドナルド氏が、初めて政權を掌握し經倫を行つたのは一九二四年であるが、一八九二年の最初には勞働黨の議員は僅かにたつた二人しか當選して居らない。即ちケヤ・ハーデー氏とジョン・パインズ氏とである。そして其最初の二人よりして勞働黨内閣を組織するまで三十二年の短日月より經て居らない。一八九二年に僅かにケヤ・ハーデー氏とジョン・パインズ氏との二人の勞働黨議員が、三十二年にして下院に多數を制すると云ふことは、如何に其發達の順調にして而も急速であつたかを知ること出来る。之に比するに我國普選の當初に八名の無産黨議員を出したことは大成功であつて、各無産政黨にはそれほどの思想、感情があつて全部を打つて單一政黨とすること難いだらうけれども、少くとも社會民衆黨を基礎として極左傾以外の無産政黨が一團となり、起つて無産大衆の爲に正々堂々の陣を布いたならば、それこそ大なる威

力を發揮すること出来るのであつて、斯くする時は了度普選以前に議會政治を認めぬ無産運動の傾向が、現在普選の實施と共に著しく右翼化した如く、極左傾を除く分子の外は同ずるべく、又中立派中の進歩分子の之に参加するもあるべく、加之、日新教育の進歩と時代文化の向上とは、我國全土の智識階級を刺戟して、其大勢の嚮ふところ至大の輿論を造成するに至るであらう。

顧みれば明治三十四年、安部、堺、片山、幸徳、西川、木下の諸氏が普選を唱へて社會民衆黨を計劃し、當時の國情之を許さず、直ちに解散を命ぜられたが、時を閱する二十七年、今や普選の當初に八名の無産代議士を議會に送るを見る時、誰か多少の感慨なきを得ぬであらう。

そして當時に於ても、先生は其人格、識見に於て最も同人の尊敬するところであつたが、其後幸徳は大逆罪に、堺氏は共產黨事件で下獄し、

又片山氏は勞農露西亞の賓客として國外に在る時、先生だけは一度も下獄せざるのみか、當局の苛酷なる壓迫をすら受けたることがない。尤もそれは決して下獄せず、又苛酷なる壓迫を受けたることなきは誇るに足らないけれども、而もそれは斷じて先生の精神の卑怯なるものでなくして、そのキリスト教徒たり又平和主義者たる先生の思想、性格の致すところ、往年先生と共に雑誌『新紀元』を出して戦つた火の如き情熱の所有者木下尙江氏の如き、今や全然其存在すら分らず、其他堺氏初め多くの主義者中、先生の如く本格的に眞面目に無産大衆の幸福を企圖すべく社會乃至政治の表面に乗り出して來たものはないのである。即ち先生の思想、性格の飽くまで漸進的であり實際的である所以であつて、所謂倦まず撓まずの語は先生に於て最も適切なるものである。社會民衆黨の穩健にして漸進的であり、堅實にして紳士的なるは、即ち先生の思想、

性格と一致するもので、そしてそれが全國智識階級乃至一般國民の間に最も尊敬と信望とを繋ぎ、併せて其將來を囑目さるゝ所以である。

今回の選舉の如きも、先生のはそれこそ文字通り絶對の理想選舉であつて、各方面よりの寄附は選舉費用を差引いても尙餘りあるので、他日之を公表すると云ふことである。斯くの如きの成績は實に先生であればこそ出來たので、先生は實にフェア・プレーの人であり、そして又如何にも明るい『完人』の感じのする人である。私が先に人も先生の如きセントメントに達すること出來れば安全なるものであると云つたが、すべてが眞面目で本格的で、其間毫末の銜氣や危ッ氣のない所が先生の先生たる所以で、今日我國過度時代の無産政黨の指導者として最も必要なる人である。

先生は一昨年十二月、社會民衆黨の結黨式に當つて云はれたが、それ

は無産大衆の幸福を獲得すべく無産政黨が伸びゆく爲には、先づ第一に各自一己の野心を除去すること、互に包容力を持し小異を捨て、大同に就くことであつたが、右は最も容易のやうにして至難事中の至難事に屬し、既成政黨と云はず、無産政黨と云はず、其不統一と紛糾とは何れも源を此二者に發するものである。今まで無産政黨は既成政黨の泥試合を嘲笑して居つたが、無産政黨と雖も、眞に誠實公正、克己努力の志向なくんば、たとひ既成政黨的色彩の泥試合に到らぬまでも、其處に人間の醜惡なる部面を呈露せざること必ずしも保證し難い。吾人の往々にして社會運動乃至無産運動の其思想と理論とに共鳴しつつ、而も實際に當つて失望を禁じ得ざる場合あるは、即ち如上の事に類する多きを以てである。

人は各自其面容の異なる如く、其思想、性格に於て差異あるは已むを

得ないことである。然しながら如何なる時と場所たるかを問はず、吾人の態度は飽くまで誠實であり、そして又公明でありたい。即ちスポーツマンシップの上に據れるフェア・プレー式でありたいものである。

私が先年『予が理想の人・安部磯雄先生』の一文を書いた起因は、平素先生を崇拜して居つたが、先生の當時の著書『理想の人』を読み共鳴したるによるもので、それは當時先生が四十歳前後で、未だ現在の私どもの年頃の著に係るものである。而もそれは先生二十餘年來の練磨經驗せられたる修養の研究を集めて一卷としたるもので分ちて倫理、宗教、教育、家庭、社會の五編とし、穩健の思想、着實の筆致、先生獨特の面目は躍如として此裡に見ること出来、全紙一の駄文字なく、編章悉く吾人が人格修養の神髓を説いて餘すところなかつた。就中、人生の第一義に立ちて吾人が人としての義務を説き、人は理想の政治家、教育家、文

學家、實業家たるの前に、先づ『理想の人』たらざるべからずと斷じて、所謂世の僞英雄、似而非成功者をして顔色なからしめ、更に質素の生活は獨立の生活なりと高唱して、憤然、虚偽虚飾の貴族的道德を痛罵するの邊り、實に熱誠にして尊敬すべき平民的紳士の眞面目を發揮して壯快云ふべからざるものがあつた。

今の世に知名の政治家多く又有名の文學者が多い。而も『理想の人』たり得るもの幾人ぞ。否『理想の人』たるの難きは之を何人にも求むべきでない。せめて純正博大の人間性の所有者にして初めて政治を論じ文學を語つてほしい。況んや社會改造の偉績と經世の大業は、眞摯熱烈なる志士仁人の風格にして初めて之を能くし得べきだ。

私の衷心、人は先づ何よりも『人間』であらねばならぬと高唱する所以である。

今や國民總意の審判による新議會の開會も目睫の間に逼り、日比谷座ならぬ新しく明るき普選帝國議會の議政壇上に、悠揚迫らず平靜そのものゝ如き先生の風格を仰ぎ得るの日近きを思つて、私は衷心よりして轉た歡喜の情に堪へないものがある。

坪内逍遙博士を偲ぶ

坪内逍遙先生の訃報に接して私は近來にない衝撃を受けた。全く世界的文豪として國寶的存在であつた先生を失つたことは、我國の文壇乃至國家としての一大損失である。實に文字通り巨星地に墮つ感慨を禁じ得ない。

此際私如き者が筆を執ることは僭越であるかも知れぬが、暫らく御許しをいたゞいて、我國の文壇乃至劇壇にとつて餘りにも足跡の大きかつた、そして人として如何に良心的であつたであらうところの此人を偲んで見たい。

逍遙先生が今から五六十年前、明治文壇の先驅者乃至開拓者として筆

を執り初められてから、此度熱海の双柿舎に溘焉として逝かれたまで、如何に先生がルネッサンスにも比すべき明治、大正、昭和の三代にかけて輝かしい業績を遺されたかと同時に、又如何に先生が良心的であり責任感の強い人であつたかを語つて見たい。先生の我國文壇乃至劇壇に對する不朽の功績並に其高潔なる人格は、既に萬人の認むるところであるが、私は此處に先生は如何に物事に打込む人であつたか、又如何に全力を盡すの人であつたかを究めて見たい。

近年先生は、熱海の双柿舎に悠々自適の生活をしてゐたと新聞には報ぜられて居るが、所謂其悠々自適裡、如何に學者として文人として刻苦精勵されて居られたか。世界的權威であると云はるゝ其セークスピアの翻譯に於ても改譯又改譯、齡將に八十に垂んとして其全精力を全集四十卷に傾注せられ、最後のオセロの卷を現代語に改作せられた頃は病漸

く進み、遂に『セークスピア研究の榮』を絶筆とし、而も死後一切のことを處理（邸宅、印税等すべてを演劇博物館に寄附）して逝かれたことは如何なる言葉を以て之を云ひ現してよいか。或時早大教授の五十嵐博士が、先生の御老齡を案じられて靜養を勧められたに對し、先生は『ながらへば十年は十とせ三年あらば三とせのわざをわれいとなまむ』との歌を寄せられたと云ふことだが、責任を以て業績を後世に遺し、社會文化の進展に貢献せむとする學者乃至文人としての、良心のほどが見えて涙ぐましい限りである。『文章報國』とは正に此事を云ふのであらう。

近世我國文學の父として、又明治文壇の開拓者として歩み來つた先生の道にも、此良心的乃至責任的な誠實と熱意とは絶えず附隨して來て居るので、評論と創作とは常に相前後して、現實的乃至模範的意味に於て持論を作品の上に表現して來て居られる。それは先づ第一に明治文壇創

作界の先驅を爲した『小説神髓』と『當世書生氣質』更に『史劇論』と『桐一葉』『新樂劇論』と『新曲浦島』等、苟くも自己の提唱せる理論に對しては、必ず作品を發表して之が現實的效果を示さねば已まなかつた。之が實に學者として又文藝家として良心的であり又責任的人であり、尙又セーパークスピア全集と共に先生の二大業績の一つである演劇博物館に對しても、自己の全部の蒐集物は勿論、死後邸宅、印稅其他の一切合切を舉げて寄附する等、如何に物事に打込む人であり徹底せねば已まぬ人であるかを物語るもので、往昔早稻田中學校長であつた場合、自ら禁煙して範を生徒に示し、たとひ文部大臣と雖も校内は斷乎として之を許さなかつたさうである。

尙大隈内閣の時であつたか、位階か勳等かを授くることに就いての内示があつたに對し、天爵を欲する先生は固辭して受けなかつたさうであ

るが、此度熱海に於て逝かれた場合も、故人の遺志として双柿舎の玄關に『香奠供物一切辭退』と貼られたことまでが、終始一貫先生の面目を表現して餘りあるものである。

それから先生に就いて特筆すべきことは、先生は實に斯くの如き良心的乃至精神的の人、換言すれば人格の人であつたが、先生の人格は人として生きたる人格であつて、決して世間に云ふ乾からびた人格ではなかつた。即ち一面文藝家であつた先生は他の一面に於て倫理學者であり、倫理教育に對しても中等學校の教科書まで作つたほどだが、然し先生は所謂道學先生とは反對の人で、其血管には人間味豊かな情熱が常に脈搏つて居られた。蓋し虚偽虚飾を排して人間としての眞の姿を實現しやうとするにあつたと思はれる。先生が初めて『當世書生氣質』を書いた時には、大學教育を受けた者が小説を書くなどは怪しからんと云はれ、早

稲田の學生が先生指導の下に沙翁劇などをやつても、學校で役者の眞似をさせるとか騒がれたさうだが、今でこそ小學校でさへ舞踊などをやるが、五十年前の小説家（戯作者）三十年前の演劇家（役者——甚だしきは川原乞食）に對し、一般世間がそれらの社會的地位を理解し得なかつたことは無理ないとも云へるが、然し先生の眼と歩みとは常に時代の前方に注がれ、先生の人格乃至倫理と云ふことは、もつと人としての本質的な深さにあるのである。

自分などの早稲田に入學した當時、坪内士行氏などはジャケットを着て跳ね廻つて居られたが、あれで家に歸れば三味線や踊をやると聞いて驚いたものである。そして教室での先生の講義ぶりも洒脫輕妙、圓轉無礙、あらゆる登場人物そのまゝの形と心とを表現するので、例へばトルストイの『復活』でも、裁判官が出れば裁判官、娼婦が出れば娼婦さな

がらを演出するのであるから、身は教室に在るのを忘れるほどであるが、それで居て全體に於ての嚴肅感を失はない。蓋し藝術と人格との渾然融合せる先生によつて初めて行はれ得ることであらう。

先生は前にも云つたやうに、ルネッサンス時代にも比すべき明治、大正、昭和の我國に於て、而も批評家、創作家、文藝家、演劇家、翻譯家、教育家として八方に其天才を發揮せられ、而も學者として文人として前記の如く終始一貫文章報國に身を致された。全くイブセンのブランド型なオトル・オア・ナシングの人で、それこそ文字通り一生懸命、即ち自己の使命とする學藝に全生命を献げ通した人である。功績既に成り、一切の後事を處理し從容其七十七年の生涯を了ふるや、光芒燦として將に天空を蔽ふの慨がある。

近來文化の發達めざましき我國に於ても、未だ文藝に對し泰西の如く

にあり得ない。されば我國現文壇の上に不朽の金字塔を樹てられた先生もバンテオンに葬られること出来ないが、時恰も帝國議會開會中に屬し、各派一致院議を以て、此世界的文豪が生前の文勳に對し、異例の敬意を表して之を弔せむとするは、是れ近世我國文學の始祖たり、又文學史上稀に見る最高峯的存在である先生に對する國家の禮義たるべきも、一面先生天分の然らしむるところと同時に、又天徳の致すところと思惟せざるを得ない。

省みれば微小私如き者が敢て此一文字を草し、餘りにも其足跡の大きかつた先生を偲ぶことは烏滸がましいけれど、先年農民藝術の論文草稿に際し、ページェントに就いて先生に教を乞うたら、態々懇切なる御手紙を熱海から賜はり、誠にありがたく心から感激した次第であつた。そして昨年セエークスピア全集の出版記念に、朝日講堂で『ヴェニスの商

人』の朗讀がラヂオで中繼されると云ふので、一夜をなつかしみ聽いたが、昔ながらの朗々たる音聲で身振さへも見ゆるが如く思はれた。そしてそのかみのトルストイの『復活』やイブセンの『ブランド』に無限の感慨を禁じ得なかつた。

噫、人生は短く藝術は永い！

謹んで先生の御冥福を祈る次第である。

長壽山廣業寺

上林温泉は、いつ来て見てもよい所である。私は縁あつて大正九・十の兩年秋を此地に遊び、其後も時を隔て、二度ほど来たことあるが、信濃の山々に圍まれた海拔三千尺の高燥静寂の地に、玉の如き温泉が豊富に湧き出で地方的素朴な環境の裡、一面近代設備の整つて居ることは、贅澤にあらずして、而も快適を極むるの仙境であると云はなければならぬ。

私の初めて此處に遊んだ動機は、寺崎廣業畫伯が生前深く此地を鍾愛して別墅を建てられ、それが寺になると云ふことを知つたに因るもので、私が此一文に標題とした『長壽山廣業寺』こそは、即ち畫伯の別墅の後

身のそれである。

廣業畫伯が初めて此地に來られたのは明治四十三年頃で、それは豫て令息廣載氏が中學時代に上林に來られ、其景勝地たるを稱讚したのを聞かれた上、近くの中野町出身の町田曲江氏を畫伯に弟子入させるに世話したのは、矢張中野町在上林温泉の開拓者たる塵表閣主人であつた爲、丁度其頃曲江氏も腕が上つて文展に入選したり、博覽會に賞牌を得たりしたので、預つた弟子も之れ位にまでなつたと云つて曲江氏を連れて來られたのに端緒を發するさうである。初めて來た畫伯はいたく此地が氣に入り其後續けて來られては彩管を揮はれ、文展等に出品された山の景色は、此上林を根據として信州旅行中に得られた題材が多く、特に文部省の買上になつた有名な『溪四題』は、畫伯が上林に來ての最初の作品であるとのことである。それで塵表閣主人が畫伯に畫室をかねての別莊を

建てることを勧めたのに、初めの中はまだ早いとか云つて居つたさうだが、後に大正の初め頃になつて、塵表閣より少し山を登つた眺望絶佳の別天地に宏壯にして而も物寂びた別墅を營まれ、養神山房とは名づけられたのである。そして畫伯は毎年夏からかけて秋の文展の審査が始まるまでは此處に居られて、四圍の風光を賞でられつゝ幾多の傑作を描かれ、又年中の畫債をも果されたとのことである。

私が初めて來た時は丁度紅葉の眞盛りで、其頃は別墅が之から寺になると云ふ折であつたが、あの坂道を登つて玄關を望む感じは、矢張別莊と云ふよりは秋の山寺と云つたそれであつた。そして前庭に立つて眼を放てば、妙高、戸隠、黒姫、飯綱、斑生の所謂五岳が其前面に連互し、左手には白馬を初め、日本アルプスの雄峯波濤の如く遙か雲間に隱見し、脚下には澁、安代、湯田中の諸温泉に沿ひ、星川白く帯の如く流れて居

るのに、植林多き附近一帯の山々の群青が繪の如く映發せる風光の明媚さはえも云へぬ眺めである。

そして別墅が寺になつた因縁は、廣業畫伯の亡くなつた大正八年の八月、親交のあつた永平寺貫主日置默仙禪師が、畫伯の生前まだ湯を引かれなかつたのが漸く出來あがつたので（別墅は高地にある爲め上林温泉の湯を引かれず、一里近く奥の地獄谷から引いて來ねばならぬので意外に手間どり）入浴の爲め來山されて宿られた折、其夜畫伯が禪師の枕邊に立つて『別墅を寺にしてみらひたい』と告げたので、禪師は早速塵表閣主人に話し、更に遺族並に門弟の間に議纏つて寺にすることになり、大正十二年七月二十一日入佛供養の儀を修して、長壽山廣業寺となつたのである。

そして寺號の長壽山の起りは、永平寺の直ぐ下に末寺長壽院と云ふ寺

があつて、それが堂守もなくなつたので、其寺名を移したらよからうと云ふことになり長壽院としたのであるが、福井、長野兩縣に願ひ出した書類の指令がなか／＼下らず、漸く大正十一年の秋、長壽院移轉の件が兩縣共に通過し、更に手續の上、長壽院は前記の如く長壽山廣業寺と改稱することになつたのである。

尙本尊は廣業畫伯の念持佛たりし藥師如來で、以前は相州三浦郡逗子町字山の根の藥師堂の本尊として安置しあつたものが、其本堂の廢絶せむとするに當り、鎌倉の旅館三橋の主人が之を勸請し、後畫伯の手に移つたもので、鎌倉時代の作に係るさうである。そして寺は大本山永平寺の直轄に屬し、同寺の東京出張所の監院が住職に在るが、平素は尼僧が居つて守り、朝夕の行持をいそしんで居る。

斯くして長壽山廣業寺は、實に我國畫壇一代の巨擘たる寺崎廣業畫伯

を開基とし、一代の傑僧日置默仙禪師を開山として此景勝地に位置されたのであるが、畫伯が佛教に身を入れるやうになつたのは、偏に默仙禪師との接縁に因るもので、其最初は東京新宿の濱野茂氏邸に畫伯が揮毫中、同家に屢、滯錫せられた禪師と相見てから、其人物に傾倒すると共に其化縁にあづかつたので、大正八年二月畫伯の病が革まつた時、禪師は折柄全國巡錫の途に上らうとして居た時であつたが、親しく畫伯を其病床に見舞つて、生死一如の安心を與へた上、澄心庵大悲廣業居士の戒名を授けられたとのことである。

思へば奔放不羈天才藝術家肌の畫伯が、遂に金剛不壞の禪定力に磐石し、而も此無二の道友の導縁により、其別墅の長壽山廣業寺となつて遺香を後世に傳へることは、まことにありがたき因縁であると云はなければならぬ。

葛温泉から

青森縣葛温泉は大町桂月翁によつて、可なり前から私にとつて憧れの地である。

八月下旬と云ふに、快晴暑熱の樺太のスピード旅行より、稚内、函館間三十時間近くの汽車と、連絡汽船三等艙詰の中に青森に上陸したのは八月二十七日午前五時、暫らくぶりの雨である。五時半の省營バスにて葛に向つた。雨次第に晴れ、山に入るに従つて雲霧が彼方此方にかゝる。約二時間半にて葛に着いた。

人によつては、省營バスが出来たり便利になつたりする爲、人が多く入り込み仙境が俗化すると云ふ向きもあるが、私と雖も俗化を歓迎する

ものではないけれども、然しよい所へは誰も來たいだらうし、自分ばかりで獨占しようたつて、それは無理と云ふものだ。かゝる人々は更に又自分達の仙境を探したらよい。私はとにかくかうして一週間足らずで樺太まで行つて歸り、僅かの時間を利用して此處に來られた交通機關の設備をありがたく思ふ。

桂月翁は確かに一代の文豪であつたが、故翁の最も人に親しまれるのは、あの人間としての純粹さだ。明治四十年初めて葛に來られ、大正十年から十四年までこよなく此地を愛で住はれ、遂に骨を葛温泉に埋めたことは、故翁の何とも云へぬ人間としての魂のよさを私には感ぜしめられる。あの自然石の墓、何の奇もないありふれたあのあばら家の餘材庵、翁の盛名に引かれて來た人々にとつては、或は餘りに物足らないかも知れぬが、あの自然石のあれだけの墓、又それこそほんたうの餘材庵、す

べてはあれでよいと思ふ。恬淡飄逸の故翁の佛があれによつても忍ばれて、敬慕の情が一段とこみあげて来るものがある。

故翁の墓でも、單にあれだけの自然石を置いたまゝと云へば、それまでであるが、あの鬱蒼として墓石のうへを蔽うて居る、三百年以上にもなると云ふ檜の大木、それから後に續く素晴らしい自然の背景！生前故翁が飄然として深い樹林の間を逍遙された姿が、あれを通して眼前に髣髴される。鳶に來て單に温泉場のみを見たでは鳶の真相は分らぬ。矢張温泉を包む一體の深い樹林の中に歩みを運んで見る時、初めて故翁の鳶を愛した心境が分るやうな氣がする。つまり翁にはあの『自然』が何より好きであつたらうと思はれる。

それから墓石の前、左右に置かれた石燈籠、それは島根縣簸川の元中學門弟一同によつて建てられたものであることを見て、私は一層のなつ

かしさの感に堪へなかつた。それは中學時代、私は鹽井雨江の『暗香疎影』を愛誦し、巻頭にある『いかばかり浮世の嵐つよくとも心の花は散らさじと思ふ』と云ふ、同氏が出雲の簸川中學に赴任し、生徒のストライキに同情して辭表を叩きつけ、都門に歸る折に詠まれたその歌をば、當時自分は中學生らしき感激でいたくも愛誦したものであつたからである。桂月翁も雨江と同時に、或はいつかは知らねど、矢張簸川の中學に赴任したと見えるが、嘸若き大町文學士はおもしろい先生であつたことであらう。そして又私が初めて桂月翁の文集に接したのは、未だ小學高等科の時代、桂月、雨江、羽衣合著の『花紅葉』と云ふ美文韻文集であつたので、文學的趣味に入つたのは中學頃からだが、まだよくは解らぬながらも小學時代『花紅葉』を買つて見たことは、私をして幼い頃からいとも故翁をなつかしく印象せしめて居る。

尙桂月翁に就いては、酒を語らねば畫龍不點睛の憾みを免れまい。と
 かく故翁の酒好きは有名なもので、飄逸酒を被つての天真自然の佛が
 此處に來つて一しほに惚ばれる。今は旅館も新らしく建増したが、あの
 古い廣い臺所の櫓火にあたりながら、漬物で、もやつて居つたらうほ、
 多ましい情景なども今更に惚ばれる。

此處に遊ばむ者、故翁に對する情誼よりしても一盞を手向けずばなる
 まい。

酒に關聯して思ふこと

告白すれば、酒に就いては私も随分長いこと苦勞して來た人間の一人
 である。以前『酒に對する態度』など其他書いたこともあるが、然しい
 くら力んで見たところ、酒は魔性のものであり、自分自身の力では容易
 に何ともならぬが、結局は『機縁』と『必要』とで其態度が決定されて
 ゆくのである。酒はよい意味でもわるい意味でも一の藝術であつて、我
 我的實生活に於てこんななまで強い魅力を持つものは外にあるまい。全
 く『憎さも憎しなつかし』と云ふところで、今度こそはと力んで居り
 ながら、めぐり逢つては返り打になつて居ることは誰もが經驗するこ
 ろであらう。

餘り酒をけなさぬ中に、先づ酒の禮讃を一つ禮讃して置かう。讚酒歌として古今獨歩の稱あるものは大伴旅人のそれであらう。

酒の名を聖とおほせし古の大き聖の言のよろしさ

言はむすべせむすべ知らに極りて貴きものは酒にしあらし

夜光る玉といふとも酒のみて心をやるに豈しかめやも

あなみにく賢らをすと酒飲まぬ人をよく見ば猿にかも似る

此以外皆絶唱に價するものばかりであるが、上戸黨にとつては將に百萬の援兵と云ふところであらう。若山牧水なども生前旅と酒とは其最も好むところであり、酒に關しての秀歌もあるが、之は又明治、大正の旅人と云ふところであらう。或本に旅人の讚酒歌に對して反讚酒歌を詠んで居つたのを見たことあるが、歌の腰折はもとより、優れた藝術乃至魔物に對して教訓歌で立向つたところで、それこそあなみにく、と云はざるを得ない。

然し又こんな狂詩もある。

吾連皆醉足難立

堪笑一無下戸雜

醉兮々々醉如泥

尻餅搗々互助合

内歸一睡夜已明

昨日遊興無影形

萬事爲夢皆消失

惟有宿醉殘未醒

之れなどはどんなものか。

こんなことが度々あつて禁酒はしても、それこそ蜀山人の

黒がねの門よりかたき我が禁酒

ならば手がらにやぶれ朝比奈

と云つて力んでも、結局は又同山人の

我が禁酒やぶれ衣になりにけり

やれさしてくれそれついでくれ

で、骨折損の草臥れもうけと云ふことになるばかりで、朝比奈ならぬご自分の力で返り打になるばかりだ。

要するに私が先に云つた『機縁』と『必要』のみが唯此事を解決する。そしてそれも『理窟』でなくして『事實』の問題である。同じ禁酒を勧め酒害を説くにしても、狂歌亂舞の席でしたら、何んだ此馬鹿野郎！とお見舞を受けることは當然で、同じくば二日酔で黄汁をこみあげて居る生死の場合か、酒失の爲に蒲團を被つて轉輾反側の時がよい。但し一時の興奮感激と云ふやつは永續にとつては餘り當にはならない。どう云つても繰り返すやうだが、もつと根本的な『機縁』と『必要』が底力があると思ふ。

これ位にして酒のわる口に移らう。

わる口と云つても酒を主觀的にけなすものでない。私としても酒に對しては多少の友情を持つて居るから、なるべく酒を辯護したいが、之は嚴乎たる客觀的事實であるから致し方ない。然し此處では餘り理窟を云ひたくないし、又東西古今の酒害材料を標本的に列べて見たところで、之も凡そ意味ない話である。

そこで暫らく古人を拉し來つて代辯せしめたい。

『世には心得ぬ事の多きなり。ともあるごとには、まづ酒をすゝめて、強ひ飲ませたるを興とする事、いかなる故とも心得ず。飲む人の顔いと堪へがたげに、眉をひそめ、人目をはかりてすてむとし、逃げむとするを、捉へて引き止めて、すずろに飲ませつれば、うるはしき人も忽に狂人となりて、をこがましく、息災なる人も、目の前に大事の病者となりて、前後も知らずたふれふす。祝ふべき日などは、あさまし

かりぬべし。あくる日まで頭かぶいたく、もの食はず、によびふし、生しょうを隔てたるやうにして、昨日のこと覚えず。公おまやけたくし私の大事を缺きてわづらひとなる。人をしてかゝる目を見すること、慈悲もなく、禮儀にもそむけり』

之は『徒然草』の中の酒を勸むる弊を書いた一節であるが、又石川雅望の『えせ侍の酔ひしれたる事』の中に

『えせ侍の酔ひしれたるが、烏帽子もちゆがめ、杓をだにはかで、なえ／＼くた／＼となりて、七條の大路を夜中ばかりに、しどろもどろにじり行きけるが、堪へずやありけん、ゑう／＼と呼びて、すゞろにつき散して其儘にたふれ臥したる。そこにありける、犬ども、散したる物を集めて食ひをはり、また侍の口あたりをねもごろに嘗むる時、人のするぞと思ひて「あな尊むげに酔ひしれてわびにて侍るを、

斯ういたはり給ふ事のうれしさ」とて、ぬかづくやうにせしが、また眠り入りてふた／＼び起きざりけり』

などとある。なか／＼に面白き極みにこそありけれど。

實際、なえ／＼くた／＼となりて、銀座大路などを夜中ばかりに、しどろもどろによろめき歩み、はては堪へずやありけむ路の邊に臭き物すずろに吐き散らしてたふれ臥し、交番などの厄介になりたらむには、げにひが事にて侍るめりだ。

貝原益軒の『養生訓』に

『人の病、酒によりて得るもの多し。酒を多く飲みて、飯をすくなく食ふ人は、命短し。かくのごとく多く飲めば、天の美祿を以て、却て身をほろぼすなり』

とある如く、天の美祿を以て却つて身を亡ぼすは罪其人にあると云つ

てよい。尤も酒は前述の如く魔物で人力の及ぶところにあらず、罪、人にあらずして酒にありと云ふ見方もあるであらうが、結局酒は『單なる物』であり、人は『自由意志を持つて居る生き物』である以上、此悍馬は所詮騎手たる人間の手綱さばきに待つ外ないであらう。

救世軍のブース大將曰く『規律を重んぜよ。されど規律の奴隸となる勿れ』と。蓋し味ふべき言であると思ふ。

尙私は禁酒を實行して居る人々に對しては、衷心からの深き敬意を表する。

然し人は禁酒せざるべからずと云ふ規則を作つて、それに縛られるまでの必要もないと思ふ。それは法律に制定されてある未成年者禁酒法で澤山だ。(病氣其他の事情によりて禁酒する人はおのづから別問題だ)

但し此場合、私は佐藤一齋の格言

一盃則人吞_レ酒 二盃則酒吞_レ酒 三盃則酒吞_レ人

を以て、敢て自らの箴としたい。

田口利吉郎君の壯途を送る

這回、田口利吉郎君が、柔剣道學生選士一行を率ゐ、我が日本帝國の武道使節として獨・伊二國の間に使うことになつたことは、我々郷土を同じうする者、殊に美入野（秋田縣横手中學）出身として、衷心より祝賀の至りに堪へざると共に且誇りに思ふ次第である。私は茲に見入野の同窓として敢て此一文を草し、君が榮譽ある此行に驢するところありたいと思ふ。

同窓と云つても、私は田口君より少し年上で級が異なつて居つたから、在校中は親しく君と話し合つた仲でなかつたが、其後君が最初の剣道よりして更に柔道界に轉向進出し、渡米の上、十年コロンビア大學に在つ

たことなどにより、矢張、君の或意味に於ては迷惑である。と云はれる『柔道家田口』としての盛名の下に、耳にも熟し又親しみを感じて居つた次第である。それを私は先頃東京美入野會に出席して、初めて親しく君と言葉を交へ、尙又君のテーブル・スピーチにも接し、君が武道家として、而も烈々燃ゆる意氣の人であることを看取したのであるが、頃日秋田社主催の君が壯行會に於ける其挨拶は、眞に悲壯痛切を極め『風蕭々易水寒兮』の慨があり、又其所論は君が武道家としての外に、一面眞に立派な、而も磅礴たる學的指導精神の所有者たることを知り、之でこそ君が這回の榮譽を荷ふの最適任者たることを痛感し、益々君に期待するところ多きと共に又意を強うした次第である。

一國を代表して、而も海外に使うことは、何れの場合に於ても榮譽のことであり、又其使命の輕からざること申すまでもないが、時恰も日

支事變の非常時局に際し、祖國日本の姿をまのあたり、而も這般防共協定を結んだ盟邦獨・伊二國の間に顯示し、萬邦無比の日本精神を宣揚するの任務は、洵に千載の一遇であると云はなければならぬ。而も何をか日本精神と云ふ。日本精神の解釋はいろ／＼あらうが、一言にして之を盡せば、金甌無缺の皇統を中心として結び付いた殉忠至誠の祖國愛に外ならない。そして武士道も家族制度も、もとより日本精神の構成の上に重要な役割を爲しては居らう。而も古今を絶し我が日本國民の魂の核心に磅礴として神祕的に存在するものは、畏くも現人神あらひとがみの實在である。されば戦時と平時、國外と國內たるとを問はず、我々日本人は御稜威にゆるにあらざして何事をも爲し得ない。是れ實に祖國日本の時空に超越せる、眞に天壤無窮、高貴神聖の絶對眞理ではある。此恩寵と信念に一度想到する時、我等は眞に日本國民として生を祖國に享けたることの幸

福に感激せずに居られない。

斯る立場に據りて、君が今回の壯途を見る時、君が使命の如何に恵まれたるものであるかを思ふと同時に、又如何に意義深くも重大なるものであるかを痛感せずに居られない。而も今回の日支事變は、宣戰の布告こそしないが、其世界的情勢に於て日清、日露の兩戰役とは比較すべくもない。即ち日清、日露の兩戰役は、單なる一國と一國との戦争に過ぎなかつたが、此度の日支事變は、其形式に於ては支那との戦争であつても、内實に於ては英・ソに對し、眞に日本が亞細亞の盟主として、東洋十億の民族の爲め白人侵略の暴虐の前に、敢然起つて獅子王の努力を試みむとするの秋である。而も白人列強とは云へ、獨・伊二國は亞細亞に何等の版圖を有せず、日本強しと雖も、英・ソ其他世界多數を擧げての包圍に對し、獨・伊二國の盟結なくんば、獨自一國として又磐石を保し

難い。此際、君が日本と理解なく又親善關係なき諸國への使にあらずして、防共、反英の大旗の下に全世界を縦断して結ばれたる、此等兩國の間に躍進途上の日本代表として使用することも、亦實に君にとつて益々惠まれたる快適の任務であると云はなければならぬ。

『海行かばみづくかばね山行かば草むすかばね大君の——』とは、是れ獨り戰場に於てのみならず、苟くも皇國の使命の下に献身せむとする者にとつて、不斷の心構へであらねばならぬであらう。君の任務の重きと同時に、其處には人知れぬ幾多苦心のあること、思はれるが、希くは自重自愛、一層健康に御注意の上、一路平安、無事輝かしく使命を達成歸朝せられむことを衷心よりして熱禱するものである。

美入野を憶ふ

美入野は横手中學校の所在地（秋田縣）を云ふのである。私は同校の第一期卒業生として五年をあそこで哺まれたが、風光の明媚と詩情の豊かなる點に於て、おそらく全國にも餘りあるまいと思ふ。暖地から來る先生達に對して冬期間の雪路は一寸御苦勞だが、少青年の研學修業の地としては蓋し最適の環境にあるもので、私は卒業してからも三十餘年にもなるが、美入野の風光夢寐の間にも忘れ得ぬものがある。

今遙かに思ひを遠くあの美はしの原頭に馳せて往時を偲ぶ時、筆或は私情に亘るものあるかも知れぬが豫め諒恕せられたい。

x

美入野の所在地は横手町を距る北方約半里、朝倉村（最近横手町に合併）鶴ヶ谷地の高燥清明の景勝地に屬し、東に蜿蜒たる奥羽脊梁山脈を眺め、西方は旭川の清流の彼方、遙かに鳥海の秀峯山裾ゆるく雲表に聳え、北は金澤町との間に歴史に名高き後三年役の雁行の亂れたる野を控へて居るのである。そして同校の帽章の『雲』は創立當時の職員齋藤山三郎先生（内藤湖南、後藤忘言と秋田師範同窓、三藤と謳はれし逸材——後藤先生も齋藤先生と同時に創立時代の校長關藤成緒先生の下に職員たられた）の考案に成り、即ち青雲の志を表象せるもので、一面又鶴ヶ谷地の鶴に因みて雲井に通はしめたものだとのことである。美入野として殊に趣味深いのは校舎の後を通うてゐる舊道の松並木であつて、汗あゆる夏の日や月夜の美はしさなど、其爽快靜寂げにたぐふべきものもない。そして此等は通學よりも、親しく其處に起臥して春夏秋冬の朝夕を

過ごす時、其眞風光は一層の魅力を以て迫つて来る。

私は明治三十七年春、此處を巢立つに臨み、『美入野に與ふる書』なる一文を校友會雜誌に掲げて、五つ年の間、詩の搖籃として私を慰めくれた懐かしの此野に別離の涙を灑いだのであるが、それは當時愛讀して居つた高山樗牛の『わが袖の記』にあやかつたもので、私は此一文によつて思ふ存分私の美入野に對する愛慕の情を披瀝しつくした。實際私が初めて歌を詠んだのは美入野であつて、明治三十六年夏『新聲』に出たところの

観音寺の鐘の音さむう野に曳いて夕陽うするる鳥海の峯

と云ふ稚拙な歌は、早春の夕暮うすら寒い野を渡り来る観音寺の鐘聲にそゝられての詠で、夕陽の沈む鳥海の美はしさはとても堪らなくよかつた。

何年であつたか忘れたが、學年試験が済んで家に歸らうとして校門を出る時、折柄柔かな春雨が絹絲のやうにそゞいで、眼の前の御嶽、黒森が夢のやうにけぶつて見えた。

春雨にうすうけぶれる山姿うたによろしき御嶽黒森

こんな幼稚な歌も其頃のものである。

殊に忘れ難いのはハイネの詩集を懐ろに、後方松並木に沿へる柵を越えて、旭川の邊りの丘陵をそゞろ歩きした時の思ひ出である。

ハイネの詩集中でもローレライは私の愛誦措かなかつたもので

おのが心のいかなれば

かくは悲しくなりぬらむ

たゞそのかみの物語り

湧きこそいづれおのが胸

風冷やかに暮れそめて

ゆふべ静けしライン川

沈みゆく日の影うけて

かがやきわたる山の峯

旭川の清流をライン川のそれになぞらへてのさまよひは、さながら西歐の詩人の胸に通ふものあるかにも思へた。そして更に

みめ美しきたをやめの

姿ぞみゆる山のうへ

黄金のかざりひらめかし

とくや黄金のみだれ髪

黄金の小櫛手にとりて

ときつゝ歌ふ聲すなり

おどろくばかり力ある

しらべをたかく響かして

小舟こぎゆく舟人は

怕れそめたりその歌に

かくれし礁見もやらで

たゞうち仰ぐ山の上

小舟の影も人かげも

たちまち沈む浪の底

あやしき奇しきしらべもて

かくなしつるよローレライ

(尾上柴舟譯)

誦し來つて、私の胸はたとしへなき感傷にうち顛ふものあるを覺えた。

斯くしてそのかみの思ひ出は盡くるべくもないが、思へばはや三十餘年の昔、往時茫としてたゞ夢の如しとや云はむのみ。

x

美入野よ！ 私は之まで何をして生きて來たか。私はたゞ愧かしさに

堪へない。遮莫、そのかみ御身の懷ろに瞳を輝かしてバイロンを語つた

私、それは依然として今の私である。私は幼稚を愛する。小兒らしさを

愛する。若さを愛する。そして伸びゆくものを愛する。同時に因襲と妥

協と浪費と消極を心から憎惡する。みどり兒の如き生命の生々しさを以

て天地を見よ。それはたゞ驚異と成長の世界だ。

我が生命の上に翻へる旗！

それはロングフェーロの『人生の讃歌』（サム・オブ・ライフ）だ。

梁歩吟客を憶ふ

梁歩吟客逝く！ 此報は私にとつて將に青天の霹靂である。

昭和十三年九月二十五日夜、妙高登山から佐渡を廻つて上林温泉へ歸宿した私は、木堂雜誌主幹鷺尾温軒氏から一葉のはかきを受取つた。それは堀井君の訃を報じたもので、多分知つて居らるゝだらうが念の爲め知らせるとあつた。私は之を手にして今更感慨無量のものがあつた。

堀井君と初めて遇つたのは、何年であつたか忘れたが、彼が私に遇ひたいと云つて來たので、私から訪づれたのであつたが、場所は秋田縣河邊郡仁井田村大野の御物川の邊りで、彼が毎年のやうに水害にやられながら果樹園を經營して居つた頃で、初めて遇つた彼は、あの伸び伸びし

た屈托のない態度で、ヤアと云ひながら一見舊知の如く、彼の一軒家到手製の御馳走を食べながらいろ／＼と語り合つたのであつた。

尤も梁歩吟客の名を知つたのは、ずつと以前のこととて、明治の末頃に海原曙雲などと云ふ人々と共に、秋田魁新報の魁文壇に於ける彼の活躍は素晴らしいもので、何しろあの才筆にあの素質と来て居るから、縦横無礙往くとして可ならざるなき有様で、梁歩吟客の文名はまことに嘖々たるものであつた。私の遇つた時は、彼は既に亞米利加にも渡り倫敦にも寄つて來たりした後であつて、遇ふ前に無論文通はして居つたが、素朴で頑丈な農人とも思つて居つたのに、農人は真からの農人ではあるが、才氣煥發と云ふか英氣潑刺と云ふか、所謂囊中の錐で、飾り氣なき自然人としての裡に、實に異常の鋭さを持つて居るのであつた。彼は土と共に生き農場を經營して居つたが、然しそれは模範的などはもとより、具

體的な農業經營のそれではなく、自由なやりッ放しで、彼の本質は矢張詩人で、彼がホキットマンに傾倒し、其詩を譯した如きは、全く彼の本領であつて、語學の優れたる上に、人其人が當篋り役なので、彼のホキットマンの譯詩は生氣脈々として人に迫るものがあり、彼こそは事實に於て日本のホキットマンであつた。

彼は土の人ではあるが、彼の無頓着さは有名なもので、昔は泥シャツのまゝで縣廳などにも出かけ、市日に漬物などを片ツ端から手づかみに味覺しながら、ひやかして歩くなど平氣なもので、いつだつたか二人で、横手町の上野臺に差しかゝつたところ、其處に居る外人宅にドシ／＼入つて行くから、何をするのだらうと思つたら、玄關先から叫んでパン種子を貰ふのであつた。私は知つても居るのかと云つたら、四海同胞、こんなことは當然でないかとの事。彼の行動は概ね斯くの如くで、屈托

なき自然人としての面目實に躍如たるものがあつた。

昭和九年十二月、秋田社主催で『秋田文壇その頃を語る會』を銀座『ふたば』樓上に開き、鷺尾氏夫妻の外、小野花城氏及び自分も出席。石田望天氏も見える筈であつたが、用事の都合で缺席され、少數ながら此夜しみじみとした氣持で魁文壇を中心に其頃の思ひ出を語り合ひ、缺席された石田望天氏と共に、在京城の堀井君にも寄せ書を出したが、それに對する鷺尾氏への返事は左の如きものであつた。

寄せ書大に愉快。顧みて卅年たつたやうに思へず、僕は依然たる文學青年だ。尠くとも文學に關する限り青年だ。恐らく最後までだらう。「愁雲兄足下」といふ書き出しで、何十枚かの原稿を魁紙に送り、見ん事没書の厄に遇ひし事を思へば流石に遠き感あり。君が啄木にあらざりしは些か不満なり。

村田君まだ居るなら朝鮮へ洋行せよと傳へてくれ給へ。
花城大兄並に列星諸賢に宜しく。

(鷄林にて)

話が少し前に戻るが、たしか彼が郷里より東京へ出て、蘆花全集の仕事に携つて居つた頃のことと思ふが、一夜どうしたはずみか江東業平橋畔の鰻のキモ屋伊勢甚へ押しかけ(伊勢甚——本名伊勢良輔、私の郷友で三高を経て帝大獨逸文科に入ったが、近代的懷疑思想の爲に卒業を前にして退學した。社會大衆黨の片山哲代議士など三高の同窓、飛白のモンペを着け、粒は小さかつたが彼の所謂眞理の靴を穿いて大道を濶歩、團扇をバタ／＼鰻のキモを焼きながら伊勢甚オヤヂで超然たるところ、彼も亦世間得易かざる風格の持主であつた)狭いスタンドで盛んに、飲む、しゃべる、うたふ。そして英雄英雄を知るか、いたく伊勢甚を氣に

合ひ、歸りは赤壁の賦を吟じ、船を隅田川に浮べるとてイッカナきかず、當時私は三年間絶對禁酒の折で、ほと／＼もてあましたが、遂に其夜は彼氏を行方不明にしてしまつた。

其後彼が朝鮮に行つてから、私が目白に借家して居つた頃、留守中に飄然と訪ねて來たので、私も暫らくぶりで彼を招ぎ、二人で飲み合つたが、此時は殊勝にも、酒を多く飲むと興奮性の私の頭にわるいからとて、少しづつより注がなかつたが、次第に酔の廻るにつれ、例の白レグ（私は彼を白色レグホンと呼んで居つた。横班ブリモウスロツク的には出來ぬので）を發揮し、街路に出でてはしきりにタクシーを呼びとめて乗り廻し、巢鴨の中村木公先生を見舞つたところ、矢張酒が出たので、またもや盛んに飲んだ上、高歌放吟、眼中病人なしの有様で、漸く歸途に就いたところ、今度は留守中の鷺尾温軒氏宅を叩き起し、よし子夫人と談

じて歸つたが、之が彼と遇つた最後となつた。

當時彼が何の爲に朝鮮から來たのか知らせもせず、單に江渡狄嶺氏宅に居ると云ふだけで何も云はず、後で人から聞いたら、娘二人と妻君とを相次いで亡くし、其遺骨を持つて來たとの話であつたが、何からか今まで飄逸そのもので、奔放不羈と云ふ語は彼を表現するに最もふさはしい言葉で、まことに世間稀れなる圖抜けた風格の持主であり、又明朗なる野人であつた。そして彼はどこまでも文人であり詩人であつたので、著書には早い頃に『筆と鋏』『土の精』それから『農民新生への道』『大道無學』『草の葉』（ホキットマンの譯詩）『野人ソロー』等があり、大正十五年頃個人雑誌『大道』を發行して盛んに書いたが、農民乃至農業に對する彼の識見も偉いものであつたが、それは現代社會に實行性の少ないものであつて、彼の天稟は何と云つても彼の人としての優れた素質と其

文章とにあつた。朝鮮に行つてからは異本『留盃邪土』を彼一流の名譯にせるものを送つてよこしたりなどしたが、心境が次第に静寂深遠の域に達し、従來の漢詩趣味よりも更に一層東洋思想的な傾向になつて來たやうに思はれた。

土井晚翠氏の『天地有情』中の『星落秋風五丈原』は、彼の愛誦措かなかつたもので、『光を包み香をかくし 隴畝に民と交れば 王佐の才に富める身も たゞ一曲の梁步吟』實に彼こそは『梁步吟客』(晩年『留盃邪土』の譯には『平步』としてあつた)の名に於てふさはしいもので、中にも彼が酔うてはよく昂然として朗々歌つた

行つて渭南の岸の上

夫の殘柳の恨訪へ

劫初このかた絶えまなき

無限のあらし吹過ぎて

野は一叢の露深く

世は北邙の墓高く

の一節は、私にとつて感慨深くも忘れ難いものがある。

最後に遇つた時なども、秋田社で彼を迎へて座談會を開かうと云つても、又雑誌へ何かを書いてくれと云つても、テンド振向くものでなく、最初留守中に來たから『來る時は知らしてくれ』と云つても『來たければ來るし、そんな約束なんか出来るもんか』と手に負へなかつた。朝鮮で何をして居るか、聞いても云はず、語學を教へて居つたとも又農場を經營して居つたとも聞いたが、圖書館に出て居つたことは後で知つた。風の如くに來つては風の如くに去り行く飄逸の彼は彼として、もつと實際的に彼の生活を知り、たとひ遠くに離れ住んで居つたとは云へ、もつ

と彼と折々の消息をし合はなかつた私の迂濶と怠慢とが、今更に強い悔恨となつて私自身を責めるのであるが、此度彼の逝去のことを鷺尾氏の通知で見た時も、先づ第一に病氣は何だらうかと思つた。少し前一時腦溢血にやられたと云ふ話は聞いて居つたが、胃痛であるとは又意外であつた。

梁歩吟客！ 何と云つても彼は郷土では勿論、世間得易からざるの英才であり、又い^いのち^ちそのものであつた。そして彼は滾々として湧き出づる森の清水であり、又潺湲として谷間を洗ふ清流であると同時に、汪洋として流るゝ大河の迫力と、巍峨として聳ゆる高岳の逞しさをも合せ持つて居つた。彼は事實に於て、單なる一奇人にあらずして、人生の曠野を旅する一個の超人であつた。此世に於て彼が非凡人としての片鱗は稍、示したが、眞に彼の往くところを縦横に往かしめ、彼の個性をもつ

と本質的に生かさしめたかつたと思ふ者は果して私一人だけであらうか。

噫、五丈原夜半の秋ならぬ鷄林の初秋、金風蕭殺として我が梁歩吟客逝く！ 我れ傷心此筆を執れば、彼又『君は又こんなものを書いたのか』と笑つて居るだらう。

先づ着手せよ

青年にとつて立志は第一であるけれども、一度志を立てたら先づ何よりも着手することである。羅馬は一日にして成らず、殊に其目標が高ければ高いほど、之に對しての準備と其完成とに多くの歳月を要する。

此意味に於て、私は『明日の十里よりも今日の一里』を云ひたい。青年時代は春秋に富み、前途は實に洋々として長いやうに思はれるけれども、實際人生の現實に當ると、何んのかんのかと思はぬことに道草をとり、貴重時間を徒らに過してしまふことが多い。それでも若し青年時代から確乎たる目的を堅持し、而も一意これに向つて邁進したならば、たとひ世路の障礙意の如く進み得ずとも、少くともそれに近い程度の成

功を遂げること出来ると思ふ。

私は青年諸君に向つては、何よりも『先づ着手せよ』と進言したい。

如是我觀

自分は地獄にも極樂にも生れず、此現世に生れたことを感謝する。蓋し現世とは、地獄、極樂の錯綜せるもので、地獄の苦しみも極樂の樂しみも、皆其中に在る生きたる世界だからである。

『自然に服従し境遇に柔順なれ』とはよい言葉だ。然しそれは案山子の意味でない。

一夜工夫又爲梅花
三年辛苦已栽竹

(良寛)

一夜の工夫！首を回らして神仙となるには英雄でなければ出来ない。然し如何なる凡人にも一夜の工夫は許される。早まらないことだ。

『少にして學べば壯にして爲すあり。壯にして學べば老いて衰へず。老いて學べば死して朽ちず』

と佐藤一齋は云つた。『老いて學べば死して朽ちず』と云ひし古へ人の心の尊さよ！

『惱める者に對して私達が爲すことの出来る最も正しい助力は、その苦しみを彼から取り去つてやることでなく、彼自身が、それに堪へ得るやうに、彼の最大のエネルギーを引き出してやることである』

と『眠られぬ夜のために』の著者ヒルティは云つて居る。悩める者にとつて苦しくもありがたい言葉だ。

×

極樂に行かうと計らへば地獄に行く。たとひ地獄でも、よし行かうと決定すれば其處は極樂だ。神経質療法の權威森田正馬博士は、患者に對して『治さうとするな』と云つて居る。器質的疾患はともかく、少くとも精神的に關する限り眞理である。

×

森田博士は又其著『神経衰弱及強迫觀念』の根治法に、釋迦を目して『神経質性格の最高代表者』と云つて居る。神経質とし云へば、人は單に病的とのみ輕蔑するかも知らぬが、生死絶對の悩みに飽くまで執着し、竟に解脱への道に入り切つた釋迦は、其本質に於て正しく神経質である。

——何んでもよい。唯飽くまで自己を發揮することだ。

×

性格によつて其人の價値を決定してはならない。臆しつゝも進む者は勇者である。下戸の禁酒運動必ずしも價値高しとは云はれない。

×

『失敗は常に冷靜なる勇氣の缺乏より來たる』

之は自分の經驗によつて確め得たる眞理だ。蓋し勇氣のみあつて『冷靜』なければ失敗を繰り返すこと更に多い。退くべきに退き、進むべきに進むこそ、眞の兵法家ではあるまいか。

×

此世で、弱い者こそは最も強い生き方をすることが出来る。人々はよろしく彼の生れを見ずして、彼の生き方をこそ見るべきだ。人間に自信

は要らない。唯行ふことだ。

昭和十五年四月二十七日 印刷
昭和十五年五月一日 發行

著者
印

大取次店
東京 堂 上田屋書店 北隆館
大阪屋號書店 栗田書店 大東館

如是我觀

定價八十錢

(滿鮮各埠外地差料定價の一部)

著者 村田光烈

印刷者 山本 禎男
東京市牛込區山吹町一九八番地

發行者 堀川 豊永
東京市牛込區山吹町一九八番地

印刷所 宗文社印刷所
東京市牛込區山吹町一九八番地

發行所 人文閣

東京市牛込區山吹町一九八番地
振替口座東京一四七五八三番

任時 先著 山崎達夫 譯	支那文 叢書	支那教育史 上卷	四六判上 四一二頁	定價一・八〇 送料一・一五	支那過去四千年の傳統をもつ三民主義教育思想を中心として原始時代より宋・元・明時代まで述ぶ。
宋文 炳著 草野文男 譯	支那文 叢書	支那民族構成史	四六判上 三〇〇頁	定價二・〇〇 送料一・一五	支那民族來源に關する諸説よりツングース族、蒙古族、回族、西藏族、苗族に及ぶ。
阿曾村秀一 著		大陸行進 <small>若き魂を育てるの書</small>	四六判並 二二六頁	定價一・〇〇 送料一・〇〇	若き魂を育てんと熱情と大陸愛情の思慕抑へがたく心筆を執つた稀に見る氣魄のこもれる書。
岩野喜久代 著		萬里の秋	四六判上 二五〇頁	定價一・三五 送料一・一五	大陸行脚の收穫だが全卷まさに崇高化せられたる情緒の世界が展開されてゐる。
白鳥省吾 著		聖戰歌謠讀本	四六判並 一七八頁	定價一・九〇 送料一・〇九	特色あり權威ある綜合歌謠讀本として何人も推奨しおかぬ名著。
篠原武英 著	歐洲大戰 をめぐる	列強戰備の全貌	四六判並 二一〇頁	定價一・一〇 送料一・一〇	明日の危機に備へる歐洲列強に於ける軍擴の全貌を隈なく暴く。
道川逸郎 著		松陰に學ぶ	四六判並 一六〇頁	定價一・九〇 送料一・〇九	幕末の大先覺吉田松陰の眞精神を解明した萬人必讀の書である。 (若溪會推薦)
近藤修博 著		少年と惡の研究	四六判上 二五〇頁	定價一・五〇 送料一・一五	何故子供は惡に染まるか? これを實際的に説いた子供の親の相談書。
楠瀬正澄 著	最近探 偵實話	多摩川の死美人	四六判上 三一八頁	定價一・三五 送料一・一二	最近の怪奇犯罪事件の數々を如實に描く。生きた人間學でもある。
道川逸郎 著		三十秒の囁き	四六判並 一六二頁	定價一・九〇 送料一・〇九	輕妙にして含蓄のある筆致には何人も魅了される。好評讃嘆を受く。

東 京 市 牛 込 區 山 手 町 一 丁目 一 番 八 地 區 人 文 閣 振 一 替 四 口 七 座 五 東 八 京 三

398
323

終

